
Always ~ イチゴなイルカをもとめて

hiro2001

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Always イチゴなイルカをもとめて

【Nコード】

N9752C

【作者名】

hiro2001

【あらすじ】

大学を卒業したばかりの僕は、就職先の会社の入社式で、アカリと出会い付き合い始めるが、季節の移ろいに呼応するように、僕の転勤とともに二人は離れ離れとなる。やがて、遠距離恋愛の果てに別の女性を好きになった僕は、アカリと別れるが、そのことで逆に彼女の大切さを知ることになる。底なしの後悔の果てに29歳になった僕を待ち受けていた新たな出会いとは……。アカリという名のイルカをもとめて、ひたすら彷徨い続けた僕の、不器用な愛の軌跡です。

ブローグ & Story 1 - Part : 1 -

その日は、何を隠そう僕の二十九歳の誕生日だった。僕は、いつものように会社での残業を終わらせると、イルミネーションが煌く夜の街並みの中を駅へ向かって家路を急いでいた。通りの街灯はこの一ヶ月の間完璧にライトアップされていて、行き交う人々の多くは二人で肩を寄せ合いながら、それぞれのかけがえのない瞬間を過ごしていた。そう、今日は世間で言うクリスマススイブ……僕の誕生日は、そうしていつも否応なく周囲から祝福されるのだ。でも僕は、そんなクリスマススイブの、二十九歳の誕生日の夜をたった独りで過ごそうとしていた。駅から電車に乗って三十分、さらに十分ほど歩いて、僕は自分の住む安アパートの、その冷え切った部屋のドアを開けた。

中に入って部屋の明かりをつけると、その勢いのままに急いでエアコンのスイッチを入れた。そうしないことには、どうにも耐えられない底なしの寒さに襲われていたからだ。もっとも寒さの原因は何より僕自身の心の中にあるのかもしれない。僕はこの三年間というもの、ただその心の寒さと向かい合って生きてきたのだ。三年前の今日、彼女がいなくなってしまったあの日からずっと。

やがて、部屋が少しずつ暖まっていくにつれて僕の心も少しずつ温まり、次第に優しい気持ちになっていった。僕は、駅前で安売りしていたイチゴのショートケーキをテーブルの上に出すと、冷蔵庫から缶ビールを取り出してきて、そのプルタブをゆっくりと開けた。ケーキにビールというのも妙な取り合わせだったが、僕は今日どうしてもケーキが食べたかったのだ。いや、ケーキを食べなければならなかったのだ。そう、僕にとって今日のケーキは、砂漠の中のオアシスであると同時に、ある重要な儀式に必要なものだったのだ。僕は、缶ビールを目の前に掲げて乾杯し、それからゆっくりと嚙んで含めるようにケーキを食べ始めた。イチゴの甘酸っぱさが

次第に口の中に広がっていくにつれて、僕の脳裏にもそんな甘酸っぱい記憶が蘇ってきた。最初のうちは、それは本当に小さな記憶の断片だったが、しばらくすると、それは僕自身をも包み込んでしまいかねないほどに大きなものになっていった。そしてその記憶は、僕を否応なく六年近く前のある春の日に誘っていった。

僕はその日、四月初めの冷たい雨が街角をしつとりと濡らす中を、会社に向かって足早に歩を進めていた。あいにくの空模様になってしまったが、それでも僕は、これから始まる社会人としての生活に想いを馳せていたためか、その足取りは意外に軽かった。確かに、それが大学生の時のような気楽なものではないことは十分にわかっていたが、僕にとってはその不安よりも、新しい生活や仕事に対する純粋な興味や期待のほうが大きかったのだ。

やがて会社のビルが見えてきたので、僕は改めて地味な紺のネクタイを締め直し、おもむろにその入口から中に足を踏み入れた。目に入った案内板の指示に従って階段を上り、入社式が行われる会場に向かうと、そこには既に百人位の新入社員たちが、身じろぎひとつせずに静かに式の始まりを待っていた。僕はそんな張りつめた雰囲気になんともさうざりしながらも、決められた席に座ってひとしきり周囲を見回してみた。誰もが神妙な面持ちでうつむき加減に座っていたが、僕はその同じような顔の中に、ある一人の女性の姿を見つけた。彼女は、周囲の新入社員たちと同様に紺のスーツを身に着け、顔立ちに際立った特徴もなく、後ろで束ねられた髪型もいたって平凡だった。どうも鼻目に見ても好みのタイプではなく、たとえ街中で偶然すれ違っても、その存在すら認識しないだろうと思った。だから僕が、大勢の中で彼女にだけ目を止めたこと自体不思議だった。しかもあるうことが、彼女から発せられる引力によって、僕はその瞳の中に引き込まれそうになった。僕は、これまでそんな感覚を体験したことは一度もなかったのだが、何か重大なことを考えている

かのように一点を見据えた彼女の眼差しや、芯の強そうな引き締まった表情は僕の視線を、何より僕の心を目に見えない糸で捉えて離さなかったのだ。程なく式が始まったことで、その不思議な感覚は一旦途切れたが、僕は彼女の存在が頭から離れなくなってしまい、その後もずっと彼女を見続けることになった。

そして、その感覚の正体を僕自身も掴めないままに、翌日から二泊三日での新入社員研修の合宿が始まった。僕ら新入社員は、朝一番に会社のビルの前に止まっていた三台のバスに乗り込むと、高速道路を西へ走って長野にある会社の保養所に向かった。窓の外は、昨日とは違って変わった春の麗かな日差しに包まれていたが、僕はそんな景色を見る余裕もなく、バスの中に昨日の彼女を探したが、他のバスに乗っているらしく、残念ながらその姿を捉えることはできなかった。

「さつきから、何をきよろきよろしてるんだ？」
「えっ？」

突然の言葉に思わず横を見ると、そこには不思議そうに、でも笑顔で僕を見つめる一人の男の姿があった。

「俺、ナカダ サトシっていうんだ。よろしくな」

「あ、ああ。よろしく」

「で、お前は？」

「えっ？」

「お前の名前だよ」

「ああ、ウチダ ヒロミ」

「ヒロミ？ 女みたいな名前だな」

「余計なお世話だ」

「いや、今のは俺が悪かった。言い過ぎたな。ところで、さつきから何探してんだ？」

「いや、別に」

「そつか、ならいいんだけど」

その男……サトシはその後、しばらく何かを考え込んでいるようだったが、やがておもむろにその口を開いて僕にそつと話しかけてきた。

「ウチダ、俺たちの同期の中で、どの女が一番だと思う？」

「えっ？」

「だからさ、どの女がお前の好みだ？」

「さあな」

「俺はさ、今斜め前に座ってる、キノシタ トモコがいいな」

「何で名前知ってるんだ？」

「そんなの調べりや一発だろ。で、お前は？」

「よくわからないな」

「あつ、さてはお前もトモコちゃんか？」

「違うって」

「まあ、どうだかな」

サトシは悪戯っぽく笑いながら、程なくシートにもたれるようにして目を閉じた。サトシには悪かったが、僕にとってはキノシタ トモコのことなどどうでもよかった。昨日の彼女だけが、今の僕にとっての全てだったからだ。春の柔らかい日差しが、バスの窓を通して僕を優しく包み込むのとは対照的に、僕はとにかく彼女と会って話がしたい欲求だけで突き動かされていた。

Story 1 - Part . 2 -

会社の保養所に着くと、僕ら新入社員はまず昼食をとり、午後からさっそく研修のメニューに入った。一日目は講義形式の研修だったので、僕は午後の日差しが机や椅子を優しく照らす太陽のベッドで、講師の話を子守唄にしながら夢の世界へその身を委ねていた。夢の中では僕と昨日の彼女が、南の島の青い海で二人でイルカに乗って遊んでいた。僕らはイルカと話をしながら、幻想的で安らいだひとときを過ごしていた。僕は、この一瞬が永遠に続けばいいと思っていた。彼女と二人だけで過ごす南の島での日々が。

でもその日々は、いやその夢は、隣に座っていたサトシの現実的な声によってももの見事に打ち砕かれてしまった。

「おいっ、起きろよ。もう講義終わってるぜ」

「何だよ、人がせつかくいい夢見てたのに」

「人が起こしてやったのに、何だよ、その言い草は」

サトシは語気を荒げて言い放つと、怒ったのかそのまま足早に部屋を後にした。一人部屋に残された僕は、まだ夢から覚めた自分にうまく馴染めなかったが、薄暮に染められた窓の外の景色を見ながら何とか現実には立ち返り、サトシの後を追うように部屋から立ち去った。

二時間ほどが過ぎて夕食の時間になったので、機嫌を直したサトシと一緒に大広間の宴会場に向かうと、そこには既に百人の新入社員が、縦四列に並べられたテーブルの前に静かに座っていた。そのあまりの滑稽さに笑いを堪えながらも席に着くと、一呼吸置く間もなく、研修担当の人事部職員の挨拶を皮切りに夕食の宴席が始まった。僕は、何気なく周囲を見渡しながら彼女の姿を目で追ってみたが、昨日の入社式ではあれほど簡単だった作業が今日は意外に難しかった。僕は半ば探すのを諦めて深いため息をつく、仕方なく隣に座っていたサトシや周囲の会話の中にその身を埋もらせていった。

でも、一時間ほどが過ぎた時、僕は偶然にも大広間から外に出て行こうとする彼女の姿を捉えた。僕は反射的に席を立つと、彼女を見失わないようにそつと後を追った。大広間のある一階から、エレベーターに乗って上の階へ向かう彼女を刑事のように追跡するはずだったのだが、見事エレベーターに乗り遅れた僕は、行き先が屋上であることを確認すると、すぐ脇の階段を走って上っていった。日頃の運動不足から、息を切らせながらもようやく屋上までたどり着き、彼女の姿を捉えてすぐ後ろまで来た時、僕は思わず今の正直な気持ちを口に出してしまった。

「やっと会えた」

「私も」

「えっ？」

「私も……会いたかった」

彼女の言葉を、僕はどう判断していいのかわからなかった。少し酒が入っていたせいもあったが、それを割り引いても言葉の意味がうまく理解できなかった。春の夜風がゆっくりと二人の間を通り過ぎ、僕らはそうして向き合ったまま静かな時を重ねるだけだった。

気がつくと僕は、まるで以前からそうであったかのように強く抱き合い、激しく互いの唇を求め合った。考えるまでもなかった。ただ本能の赴くままに行動していた。そう、僕ら二人の心のギアは始めから既にトップに入っていたのだ。

「ひとつ、聞いてもいいか？」

「何？」

「何で俺に会いたかったんだ？」

それは、僕らがひとしきり互いの唇を弄り合い、互いの体を温め合った後のことだった。僕の問いかけに対して、彼女は少し首を傾げて考えた後、その口をゆっくりと開いた。

「昔、好きだった人に似ていたから」

「えっ？」

「冗談よ。何でだろう、昨日入社式で偶然あなたを見かけた時から、

とても会いたくて、話がしたくて。本当に、何故だかわからないんだけど」

「偶然だな。実は俺も、昨日君を見かけた時から、君にとっても会いたかったんだ」

「そう。不思議ね。私、今までこんな気持ちになったこと、一度もなかった」

「俺もだよ。自分でも驚いてる」

僕はそう言った後、彼女の額に軽く唇を当てた。彼女はしばらくの間恥ずかしそうにうつむいていたが、その後僕の頬に優しい口づけを返してくれた。

「なあ、もうひとつ聞いてもいいか？」

「ええ」

「君の名前」

「ああ、まだ言っていなかったわね。ヨシモト アカリっていうの。あなたは？」

「ウチダ ヒロミ」

「じゃあ、ヒロミって呼んでもいい？」

「もちろん」

「私のことは、アカリって呼んでね」

僕らはその後も、そうして夜遅くまでそこにいた。二人とも浴衣姿ではあったが、少なくとも僕はそこに寒さというものを全く感じなかった。むしろこうして二人でいることに、今まで経験したことのない心の温かさを感じていた。ふと仰ぎ見た夜空の星たちにさえ安らぎを感じたほどだった。

Story 1 - Part . 3 -

彼女……アカリとはそうして突然に、でも自然に付き合いが始まった。合宿から帰った後も、僕らは会社帰りに近くの喫茶店で待ち合わせ、時間が経つのも忘れていろいろな話をした。アカリはどちらかと言うと物静かで大人しいタイプだったが、優しく温かい雰囲気のある、一緒にいてほっとする女性だった。でも一皮剥くと、その奥に筋の通った意志の強さが秘められていて、僕はその絶妙なバランス感覚の上にあるアカリに、今まで付き合ってきた女性にはなかった新鮮さを感じ、次第に惹きつけられていく自分を抑えることができなかった。

「私、この歌好きなの」

「確か、アトランティック・スターの『オールウェイズ』だったよな。かなり前の曲だけど」

その日も僕らは、会社帰りにいつもの喫茶店に立ち寄って、取りとめのない話を重ねていた。テーブルの上には二人分のコーヒーとアカリが頼んだイチゴのショートケーキがひっそりと佇んでいた。店内にはアトランティック・スターの「オールウェイズ」がほのかに流れ、アカリはその曲に聞き入るように静かに目を閉じていた。

「なあ、曲に聞き入るのはいいんだけど、そのまま寝ないでくれよな」

「失礼ね、寝るわけないじゃない。さてと、じゃあケーキでも食べようかしら」

「前から気になってたんだけど、どうして毎日イチゴのショートケーキを食べるわけ？」

「好きだからに決まってるじゃない」

「だからさ、そのわけを聞いてるんだけど」

「小さい頃、お母さんがよく買ってきてくれたのよ。私が生まれてすぐにお父さんが死んじゃったから、私の家お母さんと私の二人き

りだったの。それで、お母さんが仕事から帰ってくると、必ずイチゴのショートケーキを買ってきてくれたの。だから毎日のように食べてたわね。イチゴの甘酸っぱさが何かよくて。もっとも、そのおかげで結構虫歯にもなったけど」

昔のことを思い出したのか、くすくすと笑うアカリに目を奪われていた。一瞬にして、彼女に対する愛しさが込み上げてきて胸が苦しくなった。

「だから習慣っていうか、癖みたいなもののよ、これを食べるのが」

「じゃあ、俺も食べてみようかな」

「そうよ、一緒に食べましょうよ」

アカリは、ケーキの一番上に乗っていたイチゴをフォークで取ると、僕の口を開けさせてから、ゆっくりとそれを僕の舌の上に置いた。イチゴの甘酸っぱさが口の中に広がるのと同時に、その甘酸っぱさが僕のアカリに対する想いと重なった。優しく微笑むアカリを目の前に見ながら、僕は改めて自分の気持ちと正面から向き合うことになった。

「ところで、アカリの誕生日っていつなんだ？」

「五月五日よ。全く笑っちゃうわよね、男の子の節句の日が誕生日なんて。どうせなら、三月三日にしてくれたらよかったのに」

「でも、五月五日って子供の日だろ」

「まあね。でも、小さい時は結構からかわれたわ……。で、ヒロミの誕生日は？」

「十二月二十四日。世間で言うクリスマスイブだな」

「へえ、素敵ね」

「素敵なものか。小さい時から誕生日とクリスマスと一緒にされて大体虚しいもんだぜ、そういうのって。心が歪むよ」

「ふうん。でも私たち、何となく同じね」

「何が？」

「嫌な日が誕生日っていうところが」

「そういうのって、同じって言うのかな？」

「まあ、いいじゃない」

アカリは嬉しそうに、イチゴのないケーキを口に運んだ。僕は冷めてクリームの浮いたコーヒーを啜りながら、迫り来るアカリの誕生日プレゼントを何にしようかと、漠然と考えていたところで突然閃いた。

「じゃあさ、アカリの誕生日も近いし、泊まりでどこかに行こうか？　ちょうどゴールデンウィークだし」

「本当に？　嬉しいな」

「どこか、行きたい場所とかある？」

「そうね、高原とかいいわね」

「高原か、確かにいいかもな」

「森の中に小さなログハウスとかがあって、そこでゆっくりとした時間を過ごすの。ねえ、どうかしら？」

「わかった。じゃあ、その線で考えとくよ」

「ねえ、私、何かすごく楽しみ。せっかくだから、思い切り楽しめましょうね」

アカリは同意を求めるように僕の目をじっと覗き込みながら、すっかり温くなっているであろうコーヒーに口をつけた。もちろん僕も、アカリと一緒にどこかに行けることにこの上ない喜びを感じていた。胸躍るといえるのはこんな気持ちなんだろうな、とひとり勝手に納得しながら、僕は早くも五月の蒼い風が爽やかに吹き抜ける緑の草原に想いを馳せていた。

Story 1 - Part . 4 -

「うわあ、いい景色ね」

「本当に、いい眺めだな」

その時僕ら二人は、長野の高原にあるドライブインから、眼下になだらかに広がるのどかな町並みと、さらにその向こうに聳える山々の連なりを眺めていた。五月五日のその日は、うっすらとした雲こそ広がってはいたが朝からいい天気で、僕らは中古のシビックで高速道路を西へ走らせてここに着いたのだ。

「ねえ、あの鐘鳴らしてみたいな」

アカリが指差すドライブインの片隅には、小ぶりのチャペルの鐘が設えられていて、何組かの二人連れが写真を撮ったりしながら佇んでいた。

「ちよつと、恥ずかしくないか？」

「いいじゃない、やってみましようよ」

半ばアカリに押し切られるようにして、僕らはその鐘のところにいき、アカリに言われるがままに一緒になってそれを鳴らした。鐘は思っていた以上に大きな音がしたので、恥ずかしさのあまり頬が赤くなっていくのがわかったが、すぐ横にいたアカリは満足そうに鐘を見上げていたので、僕もそんなアカリの姿にすっかり満足し、今日ここに来られた喜びに胸が高鳴った。

その夜、僕らは高原の森に佇むログハウスのベランダから空を見上げて、ひとつひとつ丁寧に星を数えていた。都心とは比べ物にならないほどの数の星たちが戯れる姿はまさに神秘的で、僕は何とかそこに流れ星を見出そうと、ひたすら目を凝らしてその姿を探し続けていた。

「寒くなってきたから、そろそろ中に入ろうか？」

「そうね」

ひとしきり星を見るのにも飽きると、僕らはベランダから中に入

り、宇宙の中心のように部屋の中央に佇む小さなガラステーブルの前に並んで座った。高原を意識してか、薄い緑のセーターにアイボリーのパンツ姿は、アカリを実年齢より五つは若く見せていた。

「今日はありがとう。こんなにいい雰囲気のログハウスに泊まれて、本当にいい誕生日になったわ」

「喜ぶのはまだ早いぜ」

僕は、怪訝そうな表情を浮かべるアカリを尻目に、あらかじめ部屋の隅に用意していた四角い箱をテーブルの上に置き、上着のポケットからCDを出してデッキのスイッチを入れた。程なく室内には聞き覚えのある音楽が静かに流れ出した。

「これって」

「そう、アトランティック・スターの『オールウェイズ』さ。そして、このテーブルに置いたものは……」

僕が恭しくも箱を開けると、そこには数多くのイチゴで飾られたバースデイケーキがあった。でも、満面の笑みで喜んでくれると思っていたアカリはケーキを黙って見つめたまま、しばらくの間口を開こうとはしなかった。

「どうした、気に入らないのか？」

「ううん、嬉しいの。ありがとう。私、ヒロミのことが好きで本当によかった」

アカリは静かに呟くと、その想いを形で示すようにそっと僕の肩にもたれてきた。僕はそんな彼女の小さな体を、儚く消えてしまわないように自分の腕の中にしっかりと包み込んだ。アカリの静かな息づかいと胸の鼓動を、僕は体全体ではつきりと感じる事ができた。僕はアカリを、この小さな体に宿る果てない想いを、これから決して離さないことをその心に堅く誓っていた。

「さあ、ケーキに口ウソクを立てるよ」

僕はゆっくりとアカリの体を外すと、ケーキに二十本の口ウソクを立てていった。本当はアカリの年齢の数だけ立てたかったのだが、どういうわけか箱の中にはそれだけしか入っていなかったのだ。ま

あそれもいいだろうと持っていたライターで火をつけると、僕は約束ながら部屋の明かりを全部消した。程なくロウソクから放たれたほのかな光の集まりが部屋中を、その中央に佇む僕とアカリの顔を照らし出した。

「綺麗ね」

「さあ、ロウソクの火を消して」

「ねえ、もう少しこのままでいい？」

「いいけど、どうして？」

「だって、素敵じゃない、こういうのって」

アカリは再び僕の肩にもたれ、ロウソクの明かりに照らされた白いケーキをうつとりと見つめていた。

「ねえ、私、いつも思っただけど、ヒロミと会ってから、私の心がヒロミの色に染められていくのがよくわかるの」

「俺の色って、どんな色なのかな？」

「うまく言えないんだけど……。やっぱりわからないわ」

「でも、それって、いいことなのかな？」

「どういうこと？」

「だからさ、アカリの心が俺の色に染まっていくことって、いいことなのかな？」

「当たり前じゃない。だって、それって私のヒロミへの想いが強くなってるってことなのよ。私たちの心がお互いに強く結ばれてるってことなのよ。ヒロミの心だって、きっと私の色に染められてるはずよ。感じない？」

「どうかな。でも、俺はアカリのこと大好きだよ」

「ありがとう」

僕らは暗闇にくつきりと浮かび上がったバースデイケーキを前に、そうして二人だけの空間に酔いしれた。時の流れ自体が別世界のこのように思え、僕は二人だけの世界に身を置きながらお互いの想いを、そして体を共有した。そう、僕らにとってはそのケーキこそが二人の心そのものであり、そこに散りばめられたイチゴの色こ

そが二人の心の色だったのだ。だから食べるわけにはいかなかった。ひとたび食べてしまえば、その瞬間に世界が壊れてしまうように思えたからだ。

それからの日々は、僕らにとって本当にかげがえのない、充実したものとなっていた。お互いが相手のことを愛し、そして愛されることが、これほどまでに素晴らしいものであることを、僕は生まれて初めて身をもって実感していた。それは地に足の着かない、空中遊泳のような非現実感に満ちていた。だから飽くことなく毎日のように喫茶店で会い、オールデイズの音楽を聞きながらお互いの時間を共有し合ううちに、僕はアカリのことを自分の一部であるように想い、もはやアカリのいない人生など考えられないほどになっていた。

Story 1 - Part . 5 -

六月も半ばを過ぎた頃、僕はサトシと一緒に、会社近くにある老舗の洋食屋で昼飯を食べていた。子供みたいだとお互いに笑い合い、ケチャップの赤さが鮮やかなオムライスを頬張りながら眺める窓の外は、舗道に染み入るように降り続く雨が織り成す灰色の世界に覆い尽くされていて、道行く人々は皆一樣にうんざりとした表情を浮かべながら、ガラス越しに僕らのすぐそばを通り過ぎていった。

「こう毎日雨が降ると、本当に嫌になってくるな。気持ちまでじめじめしてくるぜ。ああ、こんな時こそ何かいいことないのかな」

「まあ、梅雨だから仕方ないけどな」

「お前はいいよな。アカリちゃんとうまくいつてるし、仕事も順調なんだろ？ ああ、俺の隣にもトモチちゃんがいてくれたらな」

梅雨空のように陰気な声で、でも食欲は旺盛なサトシの愚痴に垣間見える哀れさについて同情してしまった僕は、何とか勇気づけようとサトシが目の色を変えそうな話を持ちかけた。

「何なら、アカリに話してみようか？ アカリとトモチちゃん仲いいから、今度四人で食事でもできるように頼んでみるよ」

「本当か？ ウチダ、恩に着るぜ」

案の定、向日葵の花のような笑顔を見せたサトシはさらに食欲を増したのか、傍から見ても気持ちいいほどの勢いでオムライスを口に入れ始めた。僕は、そんなサトシの姿を半ば呆れ、半ば微笑ましく見ながら、何とかサトシとトモチがうまくいくことを心の底から願っていた。自分が幸せな時ほど、周囲にもそれを分けてあげたい気分になるものだ、少し恩着せがましいかなと思いつつも、サトシに負けないように懸命にオムライスを食べ始めた。

「何か俺、ドキドキしてきたぜ」

「いい歳して、何緊張してんだよ。しっかりしろよ」

「あ、ああ」

それは僕がサトシに、トモコのことを約束してから一週間ほどが過ぎた、ある週末の夜のことだった。僕とサトシは会社での仕事が終わった後、アカリとトモコが待つ店に向かって通りを歩いていった。サトシは、トモコとの対面が目前に迫っているためかなり緊張しているようだったが、僕はそんなサトシを励ましながらも微笑ましく見ていた。僕がいつもの喫茶店で、サトシとトモコのことをアカリに言った時、そういうことは周囲が口出ししないほうがいいと、最初はあまり乗り気ではなかったが、友達としてせめてきかけくらいは作ってやりたいとアカリを必死に説得して実現に漕ぎつけたのだ。だからこそ、僕はサトシにこの機会を無駄にしてほしくはなかった。結果はどうあれ、精一杯頑張っただけだったのだ。

僕とサトシは仕事で少し遅れることになっていたので、店に着いてテーブルに案内された時には、アカリとトモコは楽しそうに話をしながらも、何も飲まずに僕らを待っていてくれた。

「遅いじゃない、ヒロミ。いい加減、もう飲み始めようかって思ってたのよ」

「仕方ないだろ。仕事だったんだから」

「まあ、いいわ。さあ、二人とも座って。取りあえず何か飲みましょうよ」

アカリはそう言うやいなや、僕らに何も聞かずにビールを四人分注文した。レスポンスよくジョッキが運ばれてくると僕らは軽く乾杯をし、それから改めて合コンのように自己紹介をした。四人とも同期だったので何となくお互いのことを知ってはいたが、細かい部分まで知る機会がなかったもので、僕らはお互いに驚いたり感心したりしながら新鮮な時間を過ごした。でも肝心のサトシは、緊張のためか少し気後れしているようで、僕とアカリが懸命にフォローしたにもかかわらず、トモコとの会話はなかなか弾まなかった。

やがて瞬く間に三時間ほどが過ぎ、トモコがそろそろ帰ると言い出したので、僕らは店を出ると、トモコと一緒に帰ると言うアカリ

と別れ、サトシと二人で駅に向かって歩き出した。

「なあウチダ、俺、もう駄目だよな？」

「そんなことないさ。また機会作るから、頑張れよ」

「ああ」

深いため息とともに落ち込むサトシを励ましながらも、当事者でない僕でさえ少し塞いだ気分になっていた。確かに今夜の感触では、率直に見てサトシとトモコがうまくいくようには思えなかった。というより、自分をアピールしきれなかった時点でサトシの不戦敗だった。僕は、ここに至って二人を会わせたことを後悔したが、どんな形であれサトシが幸せになる後押しをしてやりかったこともまた事実で、後はただ、男と女の間にある自然と偶然が二人に突然訪れることだけを願うしかなかった。

とは言え、どうにも気になって仕方がなかった僕は、数日が過ぎたある夜、いつもの喫茶店でアカリと話している時にさりげなく探りを入れてみた。

「アカリは、サトシとトモコ、うまくいくと思うか？」

「さあ、どうかしら」

「俺はちよつと、無理なような気がするんだけど」

「そうね。でも、案外わからないわよ。トモコ、まんざらでもなかったみたいだし」

「それ、本当か？」

「まあ、ナカダくんの頑張り次第じゃないかしら」

意味深な笑みを浮かべながらショートケーキのイチゴを頼張るアカリは、言葉でも表情でもそれ以上の情報を与えてはくれなかった。「まんざらでもない」という表現自体が玉虫色であり、少なくとも可能性がゼロではないだろうとしかサトシに伝えられない自分が歯がゆかった。まあ、もう一度くらいはセッティングしてあげたほうがいいかなと、おせっかいな気持ち湧き出てきたところで唐突に思考が遮られた。

「ねえ、聞してるの？」

「あ、ああ。サトシのことだろ？」

「違うわよ、南の島のことよ。夏休みの計画」

語気を強めながら頬を膨らますアカリの計画にすっかり乗り遅れてしまった僕は、頭の切り替えがうまくいかなかったこともあって素っ頓狂な言葉を返すしかなかった。それは、飲み会に遅れて顔を出した時の戸惑いに似ていた。

「そうだな、南の島で、イルカにでも乗って遊ぶか」

「何それ、何でイルカなの？」

「前に、夢で見たような気がするんだ。アカリと二人でイルカに乗ってた夢を」

「ヒロミって、時々不思議なこと言うのね」

「そうかな？」

「まあ、それもいいかもしれないけど」

アカリは僕の突飛な提案をまともに検討しているようだった。自分を納得させるようにゆつくりと二度頷くと、イチゴのないショートケーキを切り崩し始めた。僕はそんなアカリを眺めながら、いつか見た夢の光景を思い出していた。あの時は、まさか本当にそうなるとは夢にも思っていなかった。そもそも、アカリとこうして一緒にいることさえ考えられなかった。僕は、運命の悪戯というか神秘さを体感しながら、二人で過ごす南の島での日々に早くも胸を躍らせていた。

Story 1 - Part . 6 -

ある日ふと空を見上げると、いつの間にか灰色雲の群れはどこかに消え失せ、眩いばかりの日差しが照りつける青一色に覆われていた。夏の到来は僕の心の中をもクールに青くした。サトシとトモコについては、あれから何の話も聞いていなかった。僕は何となく気にはなっていたが、これから先は本人たちの問題でもあるし、あまり急かすのもよくないことだと思ったのでしばらくは様子を見ることにした。僕とアカリはと言えば、相も変わらずいつもの喫茶店を中心とした小さな世界で、他愛もない日々を過ごしていた。もっとも、少なくとも僕にとっては充足した日々であることは疑いようもなく、仕事で嫌なことがあっても、アカリの目を見つめているだけでストレスが消えていった。アカリには、フィルターのように僕の心を浄化させる神がかり的な効果があった。だから僕も、効果のほどはわからないながら、できるだけアカリのフィルターになれるように努めた。

そんな風に時が流れた七月下旬、僕とアカリはついに一週間の夏休みを取って沖縄へと向かった。羽田から飛行機で那覇へ向かい、さらに飛行機を乗り継いで南西に向かった果てにある小さな島だったが、僕らはホテルに着くやいなや部屋に荷物を放り投げると、常夏色の空気に誘われるがままに、近くにある雪のように真っ白な砂浜に向かつて思い切り飛び出した。能天気なまでの開放感が僕らをひたすらに後押ししていた。

「いい気持ちね」

「ああ、そうだな」

僕らは砂浜を横切ってひとしきりマリンスプルの海ではしゃいだ後、日除けのパラソルが静かに見つめる下で、二人並んで仰向けに横たわりながら耳元で風の囁きを聞いていた。目の前に広がる蒼さは、確かに空と海では違っていたが、夏の蒼さという点では見事に

一致していた。彼方にあるはずの水平線さえわからなかった。僕は、目に入るそういつた光景に夏を体感し、隣で目を閉じて横たわるアカリを見て心に夏を感じていた。

「でも、イルカはいないみたいね」

「ああ。でも俺は、アカリさえいてくれればそれでいいんだ。俺にとっては、アカリがイルカなんだ」

「それって私、喜んでいいのかしら？」

「どうかな。でも、俺はイルカが大好きだよ」

僕は妙に気恥ずかしくなって横にあったビールを一口飲むと、再び仰向けになって浅い眠りにその身を委ねた。パラソルのおかげで冷たさを保っていたビールが喉を伝って胃に落ちていくのを感じながら、同時に唇にアカリをしつかりと感ずることができた。その行為には、不意打ちではあったが、一方で始めから決まっていたかのような必然さがあった。そう、アカリと言う名のイルカとの口づけは、僕にとって本当に忘れ難い、何よりかけがえのない大切なものだったのだ。永遠に続く二人の世界を象徴しなければならぬはずだった。何しろここは、飛び魚のアーチをくぐり抜けた果てにある夢の楽園なのだから。

それは、夕食も終わってホテルの部屋へと戻った時だった。明かりをつけようとスイッチに手を触れると、アカリはそっと僕の手を払いのけ、ゆっくりと首を左右に振った。僕は、月明かりにぼんやりと浮かび上がる空間の片隅に佇む冷蔵庫から二人分の缶ビールを取り出すと、既にベッドの隅に座って窓の外の海を眺めていたアカリに、そのうちの一本を差し出した。

「ありがとう」

静かに呟いたアカリはプルタブを開けてビールを一口飲み、すぐ横に座った僕の肩にゆっくりともたれてきた。

「静かだな」

「ええ」

「なあ、俺、アカリと初めて会った時からずっと感じてたんだけど、アカリと俺ってさ、何か二人で一人って感じがしないか？」

「それって、お互いに不完全だっていうこと？」

「それもあるかもしれないけど、何て言うかほら、初めて会った時俺たちよくわからなかったけど、お互いに強く惹かれ合ったよな。まるで磁石みたいに」

「確かに……そうね」

アカリは、僕の言葉を咀嚼するようにビールを飲んだ後で軽く頷いた。その肩越しには、窓の向こうで白く浮かび上がる夜の海が広がっていた。あまりの静けさに、寄せては返す波の音さえも聞こえてきそうだった。

「それってさ、お互いがどこかで失くしてしまった自分の一部として、相手のことを探してたんじゃないかな。無意識のうちに」

「そうかもね」

「だとしたらさ、俺たちはもともとひとつだったんだよ。会うべくして会ったんだ。だからもう離れちゃいけないんだよ」

話の運び方に我ながら感動してしまった。自己陶酔の極致だった。アカリも同調してくれることを祈った。論理的ではなく反射的に。「相変わらず、ヒロミって不思議なこと言うけど、確かに私たち、離れちゃいけないよね。私はヒロミの一部だし、ヒロミは私の一部だし……。そうよね？」

「ああ、だから、ずっと一緒にいような」

「ええ」

僕は、期待どおりに理解を示して静かに目を伏せたアカリをゆっくりと抱き寄せると、その潤んだ唇に自分の唇を重ね合わせようとした。何もかもが僕のシナリオどおりに運ぶはずだった。でもそれは、部屋にかかってきた突然の電話によって叶わぬものとなった。それはアカリに向けられたものだったが、何気ないその電話がアカリの口をつぐませ、その表情から次第に生気を吸い取っていった。

「誰から？」

「叔母さんから。お母さんが……倒れたって」

アカリの声は、かすかに震えているように思えた。僕は、受話器を置くことも忘れて呆然としているアカリの小さな肩をそっと抱き寄せると、この状況を何とかしてやりたい激しい衝動に駆られた。本来なら今すぐにも東京に帰るべきなのだが、夜も遅かったのでそれも叶わなかった。僕が今のアカリに対してできるのは、ただその不安な想いを静かに受け止めてやることだけだった。

「どうしよう。私、どうしよう」

「大丈夫さ。明日になったら、すぐに東京に帰ろう」

小刻みに震え続けるアカリを体全体に感じながら、僕は一晩中アカリのそばで、その一途で懸命な祈りを聞き続けるしかなかった。

Story 1 - Part 7 -

次の日、僕は朝一番の飛行機で東京に戻った。アカリは精神的にかなり参っていたので、僕はその肩を抱き支えながら、彼女の母親が入院している病院へと急いだ。受付で聞いた番号の病室に入ると、そこには点滴を腕にしながら静かに眠っている病人の姿があった。アカリはその病人の体を激しく揺さぶり、その高ぶった気持ちそのままに、何度もお母さんと叫び続けた。そして、傍らに座っていた叔母さんに、訴えかけるようにその病状を尋ねた。幸いにもただの過労とのことで、数日で退院できるということだった。アカリはそれを聞いてほっとしたのか、その場に崩れるように倒れ込んだ。僕はその体を後ろから支えようと、叔母さんに一言挨拶をしてからアカリを病室から外に出し、廊下に並んだくすんだ緑色の長椅子に座らせた。

「ごめんね」

「大丈夫か？」

「うん、ほっとしたら、急に体の力が抜けちゃって」

「でも、たいしたことないみたいで本当によかったな」

「そうなんだけど。お母さん、やっぱり相当無理してたのね」

アカリは、病室の中にいる母親に向かって語りかけるかのように呟くと、そのうつろな瞳を宙に投げかけた。

「アカリ……」

「お母さん、一人でがむしゃらに働き続けて、頑張って私を育ててくれて、大学にも行かせてくれて。私が働くようになったら仕事も辞めてもらって、精一杯親孝行しようと思ってたのに」

「これからすればいいじゃないか、親孝行。アカリだって、まだ働き始めたばかりだし、これから時間をかけて、ゆっくりとすればいいんだよ」

「そうね、そうよね」

アカリは自分に言い聞かせるように二度頷くと、こちらを向いてかすかに微笑んだ。そのあまりの脆弱さに僕の胸は鈍く痛んだ。

「でも、アカリは偉いよ。俺なんか親に迷惑かけっぱなしだし、満足に親孝行なんかしてないし」

「私の家族、お母さんしかないから。今までもたった二人だけでずっと生きてきたし、普通の母子と違って特別なのかも」

アカリの声は、次第にその潤いを取り戻し始めていた。僕は、少しずつ元気になっていくアカリを横で見ながら、その人間的な奥深さに圧倒されていた。アカリが僕よりも様々な人生経験を積んできたことは明らかで、その意味で僕は自分の浅薄さを痛切に感じ、改めてアカリのことを大切に想った。それは、憧れや尊敬にも似た想いを加味していた。

一週間が過ぎ、アカリの母親は退院した。しばらくは自宅での安静が必要だったが、アカリの安心した姿を見て僕自身も本当によかったと胸を撫で下ろしていた。サトシからの急な誘いは、そんな穏やかにしかけた状況を再び乱す予感を抱かせたが、ともあれアカリとトモコを含めた僕ら同期四人は、久しぶりにまた顔を合わせる事になった。

「何だよ、重大発表って」

「まあ、そう焦るなって。それより、まずはビールで乾杯といこうぜ」

僕の問いかけを軽く交わしたサトシはそばにいた店員を呼び止めて、四人分のビールを注文した。八月半ばのその日は朝からうだるような暑さで、夜になっても一向に気温は下がらず、僕らが一角を占めるビアレストランの盛況ぶりがその状況を端的に表していた。

程なく四人分のビールが運ばれてきたので、僕らはお決まりながら今日一日の仕事に対する労いと、久しぶりの四人での再会に乾杯した。ジョッキを重ね合わせる澄んだ音が、周囲の喧騒にかき消されることなく響き渡った。

「でも、この間四人で会ったのっていつだったかな？」

「おいおい、いつまで勿体つけてる気だよ。話したいことがあるんなら早く言えよ」

サトシの惚けた口ぶりに、さすがに我慢できなくなった僕が強い口調で尋ねると、サトシは少し慚然とした表情を浮かべたがすぐにまた笑顔に戻り、僕らに向かって意気揚揚と言い放った。

「では、発表します。私ことナカダ サトシは、ここにいるキノシタ トモコとめでたく結婚することになりました」

「えっ？」

僕とアカリはほとんど同時に聞き返していた。その瞬間、一切の物音が途絶えた。手に持っていたジョッキの重さすら感じなかった。「おい、俺とトモコが結婚するって言ってるんだぞ。お前たち、おめでとうの一言くらいないのか？」

「あ、そうだな。おめでとう」

「ほら、アカリちゃんも」

「おめでとう」

取りあえずそうは言ってみたものの、僕とアカリは、その事実をどう受け止めたらいいいものかと、しばらくの間はそれ以上の言葉が出てこなかった。満足げに深く頷いた後でトモコと親密そうに話し始めたサトシを見ても、まだ実感が湧いてこなかった。

「何、二人とも黙ってたんだよ。ビール、飲まないのか？」

焦れたようなサトシの言葉で僕とアカリはようやく我に返ったが、僕はサトシに何を言えればいいのかわからなかった。と言うより、聞きたいことは山のようにあったのだが、言葉がうまく出てこなかったのだ。でも、そんな僕の想いを察知したのか、代わりにアカリがトモコに尋ねてくれた。

「それで、いつ結婚するの？」

「来年の夏くらいにはと思ってるんだけど」

「そう、でもびっくりしたわ。だって、まさか二人が結婚するなんて」

「私だつて、自分でまだ信じられないんだから」

恥ずかしそうに顔を赤くしてうつむくトモコは、でも羨ましくらいに幸せそうだった。そして僕は、そんなトモコを手に入れるサトシに少なからず嫉妬した。

「まあ、そういうことだから、ヒロミも、鳩が豆鉄砲食らったような顔してないで、もっとちゃんと祝ってくれよな」

「失礼なこと言ふなよ。でもサトシ、本当によかったな」

「ああ、まあな」

僕の言葉に、サトシは恥ずかしそうに頭の後ろに手をやった。結局その日は四人で夜遅くまで飲み続け、僕とアカリは幸せそうなサトシとヨウコの姿に、将来の自分たちの姿を重ね合わせようとしていた。と同時に、僕は男と女の神秘さを改めて感じていた。ほんの少し前には話もしていなかったような二人が、来年の夏には結婚するという事實は、やはりあまりにも唐突で信じられないことだったが、振り返れば僕とアカリも似たようなものなのだ。あの入社式の出会いがなかったら、僕らはそれこそ死ぬまで互いの存在に気がつかなかったかもしれないのだ。めくるめく時の流れの中で、僕は人間の運命の偶然と必然に想いを馳せ、たとえ気まぐれにせよ二人の運命の糸を結びつけた神様に深く感謝していた。

Story 1 - Part . 8 -

それは僕の誕生日、つまりクリスマススイブを翌日に控えた日の午後だった。僕は会社で課長に会議室へと呼び出されると、穏やかな日差しが降り注ぐ窓際でその突然の通告を受けた。

「ウチダ、入社して一年目のお前には酷なことかもしれないけど、来月から札幌の支社に行ってくれないか？」

「えっ……それは、どういうことですか？」

青天の霹靂とは、まさにこのことを言うのだろうと思ったが、そんなことを考えている場合ではなかった。とにかく理由を聞かなければと、課長に聞き返すだけで精一杯だった。

「実はな、この間お前が提案した企画がえらい反響でな、新人としては異例なことなんだが、ぜひお前を中心にプロジェクトを組んでやってもらおうということになってな」

自分の仕事が評価されたことは素直に嬉しかったが、それと札幌とがうまく結びつかなかった。というより、何故東京でやらせてもらえないのかが納得いかなかった。ただ、島流しや左遷といった陰鬱なイメージだけが頭を掠めていた。

「でも、何で札幌なんですか？」

「まず地方の札幌で試行的にやってみて、うまくいったら東京で本格的にということになってな」

「そうですか。それで、何年くらい行っていなければいけないんでしょうか？」

「プロジェクトの進行状況にもよるが、おおむね三年くらいは行ってもらうことになるだろうな」

「三年……ですか」

愕然としていた。郊外とはいえ東京で育った僕にとって、札幌という厳寒の地で三年も過ごす現実には、到底受け入れ難いものだった。やり場のないやるせなさにその場を逃げ出したくなかったが、もちろ

んそれは叶うはずもなかった。

「まあ、そういうことだから、入社一年目のお前にとっては大変かもしれないけど、みんなお前に期待してるから、よろしく頼むよ」

課長は他人事のように僕の肩を二度叩くと、そのまま静かに部屋を出て行った。一人取り残された僕は、頭の中が真っ白になり、しばらくの間呆然と目の前の白い壁を見つめ続けた。とにかく自分の仕事に認められたのだからと、その事実を肯定的に受け止めることに必死だった。と同時に、その間アカリと離れ離れになることに少なからず寂しさを覚えた。何もかもが底なしの闇に吸い込まれていくようで、哀しみに胸が打ち震えた。ふと部屋の窓から外を見ると、聳え立つビルの群れの間から、ほんのわずかではあったが日差しを浴びて優しく光る海の姿が見えた。でもそれは、物理的な距離以上に果てしなく遠く儚い存在だった。僕は涙を堪えるだけで精一杯だった。

「ねえ、何を考えてるの？」

アカリは不思議そうに、焦点のぼやけた僕の目をじつと覗き込んだ。二十四日の夜、僕らはとあるレストランで洗練された南欧風の料理と向かい合っていた。店内には、デビー・ギブソンの「ロスト・イン・ユア・アイズ」がクラシック音楽のように静かに流れていて、ゆったりとしたイブの夜に見事にマッチしていた。アカリはシンプルな白いワンピースを身にまとっていて、それは僕にたった今天空から舞い降りてきたばかりの雪の妖精を思い起こさせた。アカリは僕の誕生日を心の底から祝福してくれて、品のいい高級ブランドの腕時計をプレゼントしてくれた。でも僕は、その腕時計のことよりも、アカリに対していつ札幌転勤の話を切り出そうかと、ただそれだけで頭の中が一杯だった。

「今日のヒロミ、ちょっと変よ」

「そうかな？」

「何か、ぼおつとしてる感じで……。何かあったの？」

その時決心した僕は、今まさに目の前に佇むアカリに向かって、勇気を振り絞って言い出そうとしていた。その澄んだ瞳に自分の姿が映っていることを確かめながら、僕は必死になってアカリの心に語りかけようとしていた。

「実は俺、来月から……」

とその時、どこからともなくアトランティック・スターの「オールウェイズ」が流れ出した。なおもじっと耳を澄ませていると、それはアカリのバッグの中から聞こえてきた。

「あつ、ちよつと待って。携帯が鳴ってる」

アカリはバッグから携帯電話を取り出すと、急いでその耳に電話をあてた。でもそれは、アカリにとっていい内容のものではなかったらしく、その表情は見る見るうちに強張っていった。

「どうした？ 何かあったのか？」

僕の問いかけに、アカリは携帯電話をそつとテーブルに置くと、その視線をこちらに向けながら呟いた。いや正確に言うと、視線は僕を素通りしてどこか別の物に向けられていた。

「お母さんが、倒れたって」

「何だつて、じゃあ早く病院に行かないと。何ぼおつとしてるんだよ、さあ行くぞ」

茫然自失のアカリの目を覚まさせるように叫んだ僕は、その勢いのままにアカリの手を取って、レストランを後に急いで街の中に飛び出した。

クリスマスイブの夜というだけあつて人通りは多く、タクシーはなかなか掴まらなかったが、僕らは近くでタクシーに乗ろうとしていた二人連れを強引に撥ね退けて乗り込むと、運転手をひたすら急かしながらアカリの母親が運ばれた病院へと急いだ。ほんのわずかな時間が、果てしなく長く感じた。病院に着くと、僕らは案内されるがままに集中治療室に向かった。ガラス越しには、医者と看護婦に囲まれながら、酸素マスクで顔を覆われて横たわる一人の女性の姿が見えた。

「お母さん！」

アカリは目に溢れるほどの涙を溜めながら叫び、そのまま治療室の扉の前に崩れ落ちた。僕は、そんなアカリの震える肩を抱え上げると、すぐ近くにあった長椅子へと導いた。

「大丈夫、きつと大丈夫だから」

「お母さん……」

それきり、アカリは何も言わなかった。ただ小さく蹲り、時の流れの中にその身を委ねていた。医者でもない僕はその肩をそっと抱きながら、ひたすらにアカリの母親の回復を祈り続けるしかなかった。

でも、そんな二人のささやかな願いはついに天には届かなかった。次の日の朝早く、アカリの母親はそのまま静かに息を引き取った。僕とアカリは、目の前にあるそのシーツに包まれた体と、白い布で覆われた顔をただじっと眺めていた。アカリの目にもう涙はなかった。僕は、そんなアカリの健気な姿に胸が締めつけられるようなやるせなさを感じ、また目の前にあるその白い体に人間の命の儚さをひしひしと感じた。振り返れば僕自身、こうして人の死と向かい合うのは、中学生の時に祖母を亡くして以来だった。異様に白いまでのその治療室の空間の中で、僕はその時の祖母のことを想い、目の前の状況をただ受容するしかなかった。

Story 1 - Part . 9 -

翌日、僕とアカリは、火葬場の煙突から立ち上る物憂げな白い煙を眺めていた。空には今にも雨を降らせそうな灰色の雲が立ち込め、その中を切り裂くように数羽の鴉が飛び交っていた。あたりは本当に静かで、僕は死者の白い魂と向き合いながら、同時に横に佇むアカリの想いを見つめていた。

「お母さん、もう逝っちゃったのね」

「ああ」

「幸せだったのかな？　ただ一生懸命に働いて私を育てて、それだけの毎日で」

「きつと、幸せだったさ」

そう言うしかなかった。でも、多分そうだろうとも思った。アカリの視線は、なおも冬の澄んだ空に消えていく母親を見ていた。

「本当にそう思う？」

「愛する人のためにすることって、それがどんなに苦しくても幸せに感じるんじゃないかな。俺だって、アカリのためだったらどんなことでも苦にならないぜ」

「ありがとう」

アカリは小さな声で呟きながら、僕に向かって優しく微笑んだ。

でもその笑顔は儚くて、何かの拍子に壊れてしまいそうだった。そして僕は、そんなアカリの瞳の中に底知れぬ哀しみが潜んでいるのを見て取った。

程なく僕らは、アカリの住むアパートへと向かった。中に入るとそこには言いようのない虚無感に満たされた寒々しい空間が広がっていた。アカリは持っていた母親の遺骨を祭壇に置くと、その前にゆっくりと座り込んで、黒い縁取りの遺影をぼんやりと眺めていた。

「でも、本当にあつけないものね」

「疲れただろ。少し横になるか？」

「うつん、大丈夫」

気丈に振舞うアカリを見て、僕は今、ここで札幌転勤の話を言うことに躊躇いを感じたが、あと数日で行かなければならない状況を考えると、あえてこの場で言うしかないとは決心して切り出した。

「実はさ、今こんなことを言うべきじゃないとは思っただけど」

「えっ、どうかしたの？」

「俺、来月から……札幌に行かなきゃならなくなっただ」

アカリの顔から一切の表情が消えていた。ただがらんどこの目でこちらを見たまま、身じろぎひとつしなかった。

「それって、どういうこと？」

「札幌に転勤になったんだ、来月から」

アカリの目によろやく光が戻ったような気がした。でもその表情は、冬の日本海のように陰鬱だった。

「来月って、もうすぐじゃない」

「ああ」

「どれくらいの間なの？」

「三年かな」

「そんなに長く……」

そこでアカリの言葉は失われた。僕は今さらながら、今日話したことを後悔したが、いずれにしてもアカリには理解してもらわなかった。たとえば彼女が一般社会の、そして自らの運命の理不尽さを呪ったとしても。

「急だったんだ。たまたま俺の提案した企画が認められて、それでまず札幌でやることになって。イブの夜に言うつもりだったんだけど、こんなことになってしまっ……。ごめんな」

「謝らなくてもいいのよ。だって、ヒロミの仕事が認められたんでしょ？　すごいじゃない。確かにヒロミと会えなくなるのは辛いけど、でも大丈夫。私、一人でも頑張ってみせるから」

「本当に、大丈夫か？」

「札幌なんて、飛行機なら一時間半で着くのよ。その気になれば、

いつでも会いに行けるわ」

「アカリ……」

あくまで気丈に現実を受け止めようとするアカリが、どうしてもなくいとおしかった。何もかも投げ打って、どこか遠い所でアカリと一緒に暮らしたいという、叶わないながらも激しい衝動に駆られた。

「本当はお祝いしたいところだけど、今日は許してね。ちょっと疲れちゃったし」

「今日はいろいろと大変だったからな。ゆっくり休めよ」

僕はアカリの肩を抱えながら隣の寝室へと向かい、淡いブルーに彩られたベッドに静かに横たわらせた。

「ちよつと待つて」

そうして僕が部屋を出ようとしたまさにその時、背後からアカリのか細い声が聞こえた。

「どうした？」

「私、我慢しようと思ってたんだけど、やっぱり駄目みたい。お母さんが死んじゃったことも、ヒロミが札幌に行っちゃうことも。ねえ、泣いてもいいかな？」

「……アカリ」

僕は、アカリのその健気な姿がどうしようもなくやるせなくて、ベッドに駆け寄るとその冷たい体をきつく抱き締めた。嗚咽するように激しく泣き続けるアカリの涙を、そして果てなく深い想いを感じながら、僕はそうして一晩中アカリの心の叫びを聞き続けた。

Story 2 - Part . 1 -

程なく年が改まり、僕は札幌へと旅立った。アカリのことは気がかりだったが、かといって東京に留まる選択肢を選ぶことはなかった。もちろん、札幌に行かなくても仕事を辞めるまではいかないだろうが、僕はアカリを理由にして仕事に関して後悔はしたくなかった。ここでアカリを選べば、僕は半ば永久に仕事のことを悔い、そのことであからさまではないまでも、暗に彼女を責め続けることがわかっていたからだ。だから僕は後ろ髪を引かれながらも飛行機に乗り、この凍てつく北の大地に足を踏み入れたのだ。

札幌に着いた最初の夜、僕は何かを振り切るようにその北の街をあてもなく彷徨った。街には様々な人たちが行き交い、一見すると賑やかなように見えたが、よく見ると皆それぞれの寂しい想いを胸に秘めているように思えた。あるいは、僕自身の寂しい想いが周囲に投影されているだけかもしれないが、いずれにしても僕はこの夜の寒さ同様に、いやそれ以上に心に寒さを感じ、どうしようもなく孤独になった。それは、初めての街に対する漠然とした不安からかもしれないが、何よりも僕はアカリを東京に残してきたことを深く後悔していた。これから三年もの間アカリと別々の生活をしなければならないと考えると、僕は無性に居たたまれなくなり、偶然近くにあったバーに入って立って続けにウイスキーをストレートで三杯飲んだ。でも、そんなことをしても無駄だった。そう、ウイスキーくらいでは僕の心の寒さを取ることはできなかったのだ。僕はぼんやりとした頭を抱えながら店を出て、何とかアパートの自分の部屋のベッドにたどり着こうと、頭上の北極星を頼りにゆつくりと歩き出した。

翌日から、新しい職場での僕の新しい仕事が始まった。始めの頃は、慣れない街での一人暮らしもあって仕事を含めた生活全体が不安定だったが、日が経つにつれて次第にそれもなく、一ヶ月が

過ぎた頃には、もうあの心の寒さを感じることはほとんどなくなっていた。僕はそんな自分自身の適応能力に正直驚いたが、過去の経験を考えればまあそんなものだろうと納得し、日常生活の中に始めの頃に感じた寂しさや不安を埋もらせていった。もっともそれは、僕の心のほんの表面の部分でしかなかったのだが。

二月のその夜は雪まつりの真最中で、僕は仕事帰りに会社の同僚たちと、大通り公園に立ち並ぶ氷の建造物の群れをただ驚きともの珍しさで眺めていた。そして、アカリと一緒に見られたらどんなに素晴らしいだろうと、頬を刺す風の冷たさも気にならないほど、既に心は東京にトリップしていた。

「どうしたの？ そんなにびっくりした顔して」

背後からの突然の声にアカリを見たような気がして振り返ったが、そこにいたのはもちろんアカリではなかった。そう、ここは北の街、アカリのいる東京とは、実に千キロ近くも離れていたのだ。

「何だ、トウコか。脅かすなよ」

「何よ、自分で勝手に驚いただけじゃない」

彼女……トウコは、少し無然とした表情を浮かべながらも、僕と肩を並べながらその氷の芸術を眺めた。トウコは同じ支社に勤める地元札幌出身の女の子で、短大を卒業して去年の四月から働いていた。年齢こそ違っていたが、社会人一年生という意味では二人とも同じだったので、僕らはすぐに意気投合し、その日も他の同僚たちと一緒にこの雪まつりを見にきたのだ。それに加えてトウコの物静かで大人しい性格や、ふとした時に見せる何気ない仕草や態度の中に、僕が勝手にアカリの姿を見ていたこともまた隠しようのない事実だった。

「ねえ、実はウチダくんに折り入って相談したいことがあるんだけど、聞いてくれる？」

「何、急に改まって」

「ここじゃちょっと……。少し歩かない？」

躊躇いがちなトウコの言葉に頷いた僕は、同僚たちから離れるようにして二人で歩き出した。行く手には聳え立つように数多くの氷の彫刻が並び、煌びやかにライトアップされたその姿に、僕は改めて自分が北の街にいることを強く実感していた。

「それで、話って何？」

「ウチダくん、今彼女いるの？」

「ああ、もっとも今は東京だけだな」

「そう、じゃあ寂しいでしょ？」

「まあな。男の俺が言うのも変だけど、結構辛いな」

「実はね、私の彼も東京にいるの」

トウコは僕の横をゆっくりと歩きながら、足元に佇む小さな雪の塊をそつと蹴った。イチゴのように真っ赤なコートが彼女の若さを象徴し、僕は時期外れながらクリスマススの光景を見ているように思ったが、肝心の彼女から放たれた言葉に対してはどう答えればいいのかわからなかった。

「……そうなんだ」

「高校の時から付き合ってたんだけど、卒業と同時に彼が東京の会社就職して、それ以来ずっと離れ離れなの」

「そうか、それじゃあ辛いよな」

「最初の頃は毎日のように電話したり、夏休みや連休には彼が札幌に戻ってきたりして、毎日会えないのは寂しかったけど、それなりにうまくやってたの。でも、最近私が電話しても出てくれないし、休みにも帰ってこないし、ひよつとしたら東京で他の女の子でもできたんじゃないかって……。やっぱり遠距離って難しいのかな？」

その大きな瞳で見つめられた僕は一瞬たじろいだ。ただ純粋に、一途に男を想うトウコに対しては、僕も努めて真摯に答えなければいけないような気がした。

「確かに毎日のように会えないし、そばにいないことで寂しさや不安もあるけど、でも相手のことを信じていればきつと乗り越えられると思うよ。俺も今同じ立場にいるけど、彼女のことは信じてる

し、好きな気持ちは変わらないぜ」

「そうね……。そうよね。まず、私自身が彼のことを信じなきゃね。ありがとう、何か胸のつかえが取れた感じ。ウチダくんに相談してよかった」

トウコの笑顔に、僕は偶然宝物を見つけたような喜びを感じながらも、それがアカリの笑顔のようにも見えて切なかった。トウコに言ったことは、少なくとも今の自分の正直な気持ちであり、僕はそのことを露ほども疑ってはいなかった。たとえ現実の残酷さをわかっていないと嘲笑われようが一向に構わなかった。それこそ、真実の愛をわかっていないと笑い返してやりたかった。僕は同意を求めようとに夜空を仰ぎ見たが、頭上の北極星はただひたすらに優しく見つめ返す だけだった。

Story 2 - Part . 2 -

でもその夜、トウコたちと別れてアパートへ戻った僕は、スーツを着替える間も惜しんで真っ先にアカリに電話をかけた。少し前のトウコとのやり取りで、僕は否が応にもアカリのことを思い出してしまい、その声が無性に聞きたくなったからだ。

「もしもし、ヒロミだけど」

「ああ、どうしたの？ 声が浮ついてるように聞こえるけど、何かあったの？」

昨日電話したにもかかわらず、アカリの声は何年も聞いていないような懐かしさに満ちていた。不覚にも目頭が熱くなったが、涙声を聞かせる恥ずかしさから一呼吸置くと、妙にテンションを上げながら話を続けた。

「いや、別に何もないんだけど、何か無性にアカリの声が聞きたくなってるさ」

「毎日のように話してるじゃない。やっぱり何かあったんでしょ？」
陽だまりのようなアカリの優しさに触れたような気がして、僕は無性にトウコが投げかけた質問を試みたくなった。たとえ無意味でも、わかりきっていてもアカリの口から答えを聞きたかった。

「アカリ、遠距離恋愛って難しいのかな？」

「急に何を言い出すかと思えば、改まってどうしたのよ」

「まあ、俺とアカリは大丈夫だよな。たとえ離れていても、心はひとつだもんね」

「ヒロミ、今日は何か変よ。今度は自分で勝手に納得して。一体私に何が言いたいなのよ？」

アカリの疑問はもつともだった。相手の答えを聞く前に自分で納得してしまう不自然さはもちろん承知していた。結局のところ、僕はアカリと話したいだけだったのだ。だから内容なんてどうでもよかったのだ。

「いや、別にいいんだ。ところで、アカリのほうはどうだった？」

「どうって、相変わらずの一日だったけど」

「そうか。なあ、近いうちに会わないか？ 俺、何とか暇見つけてそっちに行くから」

「私はいいけど、仕事は大丈夫なの？」

「何とかするさ」

僕は自分を納得させるようにアカリを誘うと、そのまま満足して電話を切った。でも次の瞬間、僕はこの自分勝手な電話の内容に早くも後悔し始めていた。会話は言葉のキャッチボールなのだから、アカリの投げたボールもきちんと受け止めてやらなければいけなかったのだ。僕はアカリに対する贖罪の念に満たされたが、何より一刻も早く声を聞くことでアカリとの愛を確かめたかったのだ。そして電話だけではなく、実際に会ってお互いの瞳を見ながらわかり合いたかったのだ。この手でアカリをきつく抱き締めながら。

もっとも、物事はそううまくはいかなかった。三月を越えて四月になっても仕事に追われる毎日が続き、僕はアカリに会うどころかまともに電話をすることすらままなくなっていた。毎日のように夜遅くまで残業が続き、自分の部屋に戻って寝るやいなや、すぐに新聞配達自転車のブレーキ音で目が覚めるといった状況が続いた。アカリから電話がかかってきても、僕にはその声に応える気力が残っていなかった。とにかく僕は、そうして馬車馬のようにひたすら働き続けるしかなかった。

僕がそんな地獄のような生活から抜け出した時には、街は風薫る五月の蒼さに包まれていた。そしてその時、僕の横には新緑の若葉のように爽やかなトウコの笑顔があった。

「ウチダくん、今度の日曜日空いてる？」

ゴールデンウィーク狭間のある日、僕とトウコは、会社近くの鄙びたそば屋で昼飯をとみにしていた。食欲のなかった僕はざるそばを啜り、トウコは息を吹きかけながら天ぷらそばの熱を必死に冷ま

していた。僕は、トウコからの突然の誘いに少し驚いたが、取り立てて予定があるわけでもなく、空いていることを示すように首を縦に振ると、トウコの口から出る次の言葉を待った。

「ドライブにでも行かない？」

「まあ、いいけど」

僕は、トウコが何故急にそんなことを言うのかがわからなかった。で言葉の語尾を濁すと、それを察したのか、トウコは足りない言葉を補うかのように早口で説明を始めた。

「ほら、ウチダくん最近仕事大変だったでしょ？ だから、息抜きでもしたほうがいいんじゃないかなと思って。仕事のほうは、もう大丈夫なんですよ？」

「ああ、まあ何とか」

「じゃあ行きましようよ。私もちょっと息抜きしたかったんだ」

「でも、どこに行くんだ？」

「街から南のほうに行くと綺麗な湖があるのよ。車で行けば、それほど時間はかからないわ」

トウコは僕につこりと微笑みかけると、再び天ぷらそばとの格闘を始めた。その笑顔には相変わらず透き通った青空のような爽快感があり、僕も思わず微笑み返してしまったが、その表情の裏側にあるものが何なのか、その時の僕にはよくわかっていなかった。

Story 2 - Part . 3 -

その日曜日、約束どおり僕とトウコは車で湖へと向かった。明け方まで降っていた雨の影響で路面のアスファルトは水溜りを、沿道の草花は雨露をたたえていたが、急速に回復する天候によって午前のうちにはそれも消え去り、湖を望む展望台に車を止めた頃には、眩いばかりの太陽が僕らと湖面をきらきらと照らし出していた。

「いい天気になってよかったわね」

「本当に気持ちがいいな」

「ね、来てよかったでしょ？」

トウコは僕に同意を求めると、湖面にさざめく波の揺らめきを目の当たりにしていた。トウコは白いシャツにピンクのカーディガンを羽織っていて、薄いブルーのジーンズと、何より周囲の風景によくマッチしていた。僕らの周囲には、日曜日というだけあって多くの人々が佇んでいたが、皆一様に声を上げることもなく、それぞれに静かで穏やかな時間を過ごしているようだった。

「そう言えば、最近彼氏とはうまくいつてるのか？」

「彼とは、別れたの」

「……そうか、ごめん」

何を言っていていいかわからず、ただ不器用に謝るしかなかった。不躃な質問を後悔したが、トウコの表情にそれほどの深刻さは感じられなかった。何よりそれが救いだった。

「別にウチダくんが謝ることはないわ。こうなることは何となくわかってたし、このままズルズルと続けていても意味がないんじゃないかと思うて」

「辛かっただろ？」

「そりゃあね。でも、いつかはケリをつけなきゃいけないし……。まあ、しばらくはゆっくりしてから、新しい恋でも見つけようかなって思ってる」

どこからか鳥の鳴き声が聞こえてきたが、それはどことなく寂しそうで、今にも儚く消えてしまいそうに弱々しかった。

「私はもう終わっちゃったけど、ウチダくんは頑張つてよ。私の分まで」

何と言つて慰めたらいいのかわからない僕を見透かしたかのように、トウコはその表情にいつもとは違う寂しさを宿しながらも笑顔を見せた。それを見る僕も痛かったが、程なく近くで流れ出たアトランティック・スターの「オールウェイズ」がそこに割つて入ってきた。僕は反射的にトウコから離れると、上着のポケットから携帯電話を取り出して耳にあてた。

「もしもし、ヒロミ？」

その声を聞いた瞬間、僕はある重大な事実に気づいて愕然とした。そう、僕は今日がその日であつたことを迂闊にも完全に忘れていたのだ。

「アカリ、誕生日おめでとう」

僕は努めて平静さを装つて答えたが、心の中ではアカリの誕生日を忘れていたことに苛立ち、またそれをアカリに悟られることを恐れて生きた心地がしなかった。

「覚えていてくれてよかった。電話がなかったから、ひよつとしたら忘れられちゃったんじゃないかと思つて」

「忘れるわけないだろ。でも、ごめんな。本当なら、とびきり大きなイチゴのケーキをプレゼントしたかつただけだ」

「その気持ちだけでとても嬉しいわ。それに、イチゴのケーキならもうここに買つてあるし。あまり大きくはないけどね」

「じゃあ、俺が歌を歌つてやるよ。ハッピーバースデイの歌を」
「今歌うの？」

少し驚いた声を出したアカリに構うことなく、僕はありつたけの気持ちを含めてバースデイソングを歌った。携帯電話の向こうに広がる空間で、東京で一人ケーキと向き合うアカリに届くようにと切に願ひながら。

「ありがとう、嬉しいわ」

「さあ、ロウソクの火を消しなよ」

「うん」

アカリは頷くと、二十三本のロウソクの火を次々に消していった。そう、僕にはわかっていた。目には見えなくても、電話の向こうで必死に火を消していくアカリの健気な姿が。そして、僕もまた携帯電話に向かって軽く息を吹きかけた。

「電話、ずいぶん長かったわね」

アカリとのやり取りを終えて戻ると、トウコが悪戯っぽい表情を浮かべながら話しかけてきた。

「彼女だったんでしょ？」

「ああ、まあな。あつ、もうこんな時間だ。そろそろ帰らないか？」
なおも電話の内容を執拗に聞き出そうとするトウコを交わすように、来たばかりではあったが僕は無理矢理に帰りを促した。とにかく僕は、一刻も早く帰りたいかったのだ。そうしないことには、僕自身の気持ちを抑えることができなかった。

惘然とした表情のトウコをひたすらだめながら、僕は気もそぞろに家路を急いだ。トウコを家に送り届けるとすぐに、札幌の繁華街へ出てアカリへのプレゼントを探した。今のこの高鳴る胸の想いを、僕は形にしてアカリのもとに届けたかったのだ。それはある意味では、誕生日を忘れたことに対する罪滅ぼしだったのかもしれない。かったが、いずれにしても僕は、アカリの誕生日を純粹に祝いたかったのだ。僕は目に止まった貴金属店に入ると、ワインレッドに輝くルビーのイヤリングを買い、そのまますぐに東京のアカリのもとへ送った。そう、僕にとってはそのルビーの赤さこそがイチゴのケーキだったのだ。遠く離れた北の街から、僕はそうしてアカリの二十三回目の誕生日をダイレクトに受け止めていた。

それ以降僕は、週末になるとトウコと一緒に遊んだ。もっとも、二人きりで遊んだわけではなく、会社の同僚たちと一緒にであったが、僕はそうしてトウコと時間を共有していくうちに、これまでに

も増してその中にアカリを見るようになった。トウコという女性を通じて、アカリとの時間を疑似体験するようになっていった。だからこそ僕は、逆にトウコと二人きりになるのが怖かった。そうなれば、僕の心を取り返しのつかない場所に連れ去られてしまうように思えたのだ。でも今にして思えば、僕はトウコの中にアカリを見ているように思い込もうとしていただけだった。自分の本当の気持ちを知らなくなかったがために。

Story 2 - Part . 4 -

六月になり、サトシとトモコの結婚式の日がやってきた。それは日曜日だったが、僕は前日の夜遅くまで仕事があったことで、当日朝一番の飛行機に飛び乗って直接式場に向かった。そこは都心にあるカトリックの教会で、空港からタクシーに乗って降り立つと、目の前にはまるで中世のヨーロッパにタイムスリップしてしまったかのような荘厳な雰囲気建物が聳え立ち、視線を手前に移すと、それに負けないくらいに輝いて映るアカリの姿があった。

「久しぶりだな」

「会いたかったわ」

僕らはそこで強く抱き合うと、周囲も気にせず半年振りの温もりを互いの唇に感じ合った。そこには、時間が止まったかのような瞬間が永遠に続いていた。僕はアカリの体をゆっくりと外すと、改めてその姿をじっくりと眺めた。アカリはモスグリーンのシルクドレスを身にまとい、耳には僕が贈ったルビーのイヤリングを着けていた。

「そのイヤリング、とてもよく似合ってるよ」

「これ、とても気に入ったわ。ヒロミも案外センスいいわね」

「案外は余計だろ？」

「あつ、そろそろ式が始まるわよ」

アカリの言葉に促され、僕らは足早に建物の中に入ってしまった。式のほうは滞りなく進み、やがてサトシとトモコは、ライスシャワーが花吹雪のように舞う中、教会の入口から石段をゆっくりと降りてきた。二人の眩いばかりに微笑ましい姿は、梅雨の晴れ間の青空に光り輝き、あたかも中世に描かれた絵画のように見えた。そして僕らのそばを通り過ぎる二人に、僕がおめでとうと言いながら目配せをすると、サトシはばつが悪そうに照れ笑いし、トモコは恥ずかしそうにはにかんだ笑顔を見せた。僕はそんな二人の中に自分とア

カリとを重ね合わせ、隣に佇むアカリのイヤリングを見ながら、何とも言いようのない充実した清々しい気分になっていた。そう、その時僕はアカリとの結婚について初めて現実的にイメージしていたのだ。二人の間に永遠の時間が流れることを願いながら。

その夜、僕とアカリは披露宴後の二次会の場にその身を置いていた。そこは教会近くの小ぢんまりとしたレストランで、和やかな雰囲気包まれる中で会はずりなく進んでいった。やがてサトシがこちらに近づいてきたので、僕もそれに呼応するように席を立つと、二人でゆつくりと歩きながら久しぶりの再会を喜んだ。

「おめでとう、サトシ」

「ありがとう。でも、本当に久しぶりだな。もう何年も会っていないような気がするぜ」

改めて見るサトシは、既にいつもの人なつこそうな笑顔に戻っていた。会わなかった半年が嘘のように、二人の距離は一瞬にして縮まった。

「何年もって、ただか半年じゃないか」

「まあ、それもそうだな。ところで、お前とアカリちゃん、うまくいつてるのか？」

サトシはその場に立ち止まると、僕の目を覗き込みながらそう尋ねた。

「何だよ、急に改まって」

「いやさ、遠距離恋愛って結構大変なんじゃないかって思ってたさ」

遠慮がちなサトシの気遣いが素直に嬉しかった。これが友情なんだなと、涙が滲み出るのを堪えながら懸命に笑顔を作っていた。

「そりゃあ、毎日のように会えないから辛い時もあるけど」

「愛の力で乗り越えられるってやつか？」

「わかってるなら聞くなよ。大体お前のほうこそ大丈夫か？ 今からトモコの尻に敷かれてるんじゃないのか？」

「そりゃないだろ。俺は、正真正銘の亭主関白だぜ」

相変わらずのサトシに妙に懐かしさを感じた。離れてみて、初めてその人の有り難味がわかるというのは本当だと思った。

「まあ、何はともあれサトシ、幸せになれよ」

「お前もな」

僕らはお互いの前途を祝福し合うと、近くにあったビールで乾杯して別れた。感無量の想いで自分の席に戻ると、アカリが悪戯っぽく微笑みながら迎えた。

「二人で何を企んだの？」

「人間きが悪いな。男同士でお互いの前途を祝い合ってたんだ」

「ふうん、まあいいわ。それで、今晚はこっちに泊まっていくんでしょう？」

「ああ、そのつもりだったんだけど、実は今日中に札幌に戻らないといけなくなつて。もうそろそろ行かないと」

一瞬にしてアカリの表情が曇つたのを見て、わかつていたことではあつたが、僕の胸はきつく締めつけられた。和やかで温かい場であるにもかかわらず、二人の周囲だけは空虚で切ない雰囲気にかまれている。

「そんな、私たち、半年振りに会つたのよ。それなのに、もう帰っちゃうの？」

「俺だつて、今夜くらいアカリと一緒に過ごしたかつたさ。でも、明日朝一番で大事な会議が入っちゃって……。ごめんな」

「そう」

「夏には休みを取つて戻ってくるから」

僕の言葉にも、アカリは目を伏せたまま応えようとはしなかった。仕方なく僕はアカリを納得させるようにその額に口づけると、そのまま席を立て店の外に出ようとした。

「待つて。空港まで送らせて」

僕らは店の外でタクシーを拾うと、そのまま一直線に空港に向かった。アカリは空港に着くまでの間、ただの一言も口をきかなかった。僕は、アカリに対する申し訳なさで胸が一杯になり、明日の会

議など放り投げて二人きりでどこか遠い所に行きたくなつたが、最後の最後に僕の中で理性が感情を説得した。でもその時、僕は感情の赴くままに行動すべきだったのだ。たとえ仕事がうまくいかなかったとしても、僕は久しぶりのアカリとの時間を大切にすべきだったのだ。

タクシーが空港に着くと、僕らは札幌行飛行機の搭乗ゲートに向かった。久しぶりのアカリと一緒に過ごせたのはわずか半日で、しかも最後のほうではアカリと話をすることすらできなかったが、それでも僕らは、お互いの想いが手に取るようにわかっていた。そう、もはや二人の間には言葉すらいらなかったのだ。と、少なくとも僕はそう信じて疑わなかった。

「じゃあな。八月には戻ってくるから」

「……元気でね」

僕の瞳の奥に訴えかけるように呟くアカリを、僕は自分の心と体全体で受け入れた。時だけは、そうして抱き合う僕らを優しく穏やかな眼差しで見つめ続けてくれていた。

でも、僕はその約束を果たすことができなかった。終焉を迎えるかに見えた仕事が再びその勢いを増し始め、僕は寝る間すら惜しんで働き続けた。季節や時間の感覚もなくなって、僕は無意識のうちに八月をやり過ごしてしまった。アカリから何度となく電話もかかってきたが、僕はそれに満足に応えることをしなかった。そう、その時の僕は何もかもを仕事で言い訳していたのだ。仕事を隠れ蓑にすることで、僕はアカリと正面から向き合うことをしなかった。もはや僕には自分の気持ちがどこにあり、どこに向いているのかすらわからなかった。いや正確に言うと、わかりたくなかったのだ。何故なら僕の気持ちは、次第にアカリ以外にも向けられていたからだ。だから僕は、アカリと会うことを躊躇い、八月を意識的にやり過ごした。

Story 2 - Part . 5 -

九月に入ると、僕の仕事もようやく峠を越えつつあった。その日は明け方まで会社で働いていたので、僕はアパートに帰ると、そのまま死んだようにぐっすりと寝てしまっていた。そんな僕の眠りを妨げたのは、部屋の外から聞こえたチャイムの音だった。枕元の時計は午後七時を指していて、僕がその執拗さにうんざりしながらドアを開けると、そこには両手一杯にビニール袋を下げたトウコが立っていた。

「ごめんね。寝てた？」

「まあな。でも、どうしてここに？」

「最近、ウチダくん働きづめで疲れてるでしょ？ だから、何かパワ―の出る食事でも作ろうかなと思って。迷惑だった？」

「いや、そんなことないけど」

僕は混乱し始めた頭を横に置くと、ひとまずトウコを中に入れた。トウコはもの珍しそうに部屋中を見回すと、両手に持っていた袋をテーブルの上に置き、そのままキッチンの前に立って洗いものを始めた。トウコは白いＴシャツにデニムのショートパンツ姿で、キッチンを左右に移動するのに合わせてポニーテール風にまとめ上げた髪も揺れた。

「でも、何でわざわざ俺に料理なんか」

「同じ会社で働いてるよしみよ。何か戦友みたいな感じがしてほっとけないのよ」

僕はトウコから「戦友」という言葉が出てきたことに少し違和感を覚えたが、いずれにしてもせっかくの好意なのだからと自分を無理矢理納得させて、その後ろ姿を黙って見続けた。

とその時、その日二度目のチャイムが耳に届いたので、僕は玄関に向かってゆつくりと歩き出した。ドアの前に誰がいるかなんて考えてもいなかった。

「来ちゃった」

そこに立っていたのはアカリだった。三ヶ月前のドレス姿とは違って変わり、カジュアルな水色のワンピースを着てはいたが、それはまぎれもなくアカリそのものだった。

「どうして……」

「何か、急にヒロミに会いたくなっちゃって。だって、仕事が忙し
いからって、先月も帰ってきてくれなかったし、いつ電話しても気
のない答えしか返ってこないし……。誰かいるの？」

話している途中で気がついたらしく、アカリは足元にあった女物のサンダルに視線を留めながら僕に尋ねた。

「ああ、会社の友達が来てるんだ」

「女の人ね」

返事を躊躇っていると、アカリはその場にバッグを置き去りにして目の前から姿を消していた。僕は一瞬何が起こったのかよくわからなかったが、程なく全速力でアカリを追いかけていた。

「待ってくれ、アカリ！」

そこはアパートのすぐ近くにある小さな公園だった。僕はそう叫んで何とかアカリの腕を掴むと、彼女を、何より僕自身の気持ちえ落ち着かせるために、すぐそばに佇むベンチに並んで座った。夜とはいえ暑さの残るこの時季、ひとしきり走った僕らの服は汗でしっとりと濡れていた。アカリは肩で息をしながら、僕の隣で真っ暗な地面をただ眺めていた。

「会社の同僚なんだ」

しばらくして、僕はそう話を切り出した。どう見ても言い訳だったが、僕はアカリの誤解を解こうと、ただそれだけで頭の中が一杯だった。

「いつも、ヒロミのところに来てるの？」

「今日が初めてだよ。それに、向こうから急にやってきたんだ」

「その子と付き合ってるの？」

「そんなわけないだろ」

自分で言いながら、でも自分の声ではないような気がした。どこか遠くからフィルターをかけられたように聞こえるその声に、僕は本当の自分が別の場所にいるような錯覚に襲われた。

「でも、その子はヒロミのことを好きだと思っわ」

「何でそんなことがわかるんだ？」

「ただ何となくよ。女の勘かな」

その後しばらくは死んだような時間が流れた。僕は今、アカリに何を言っても言い訳になると思うあまり、言葉を発することができなかった。アカリに会えたことの喜びも、札幌に来てくれたことへの感謝の気持ちさえも言うことができなかった。

「会いたかったの。寂しくて切なくて、とにかく会いたかったの」
アカリは僕のほうを見ずに、ただ自分の足元を見つめながら呟いた。

「よく来てくれたね」

「さつきはごめんなさい。急に走り出したりして。やっと会えたと思ったら、足元に女物のサンダルが見えて、女の人がいるんだとわかって、それだけで何だか急に舞い上がったちゃって」

「俺も悪かったよ。これからは不用意に女性を家に入れないようにするよ。アカリ以外はね」

「それはもういいのよ。私が勝手に誤解しただけなんだから」

ようやくこちらに顔を向けてくれたアカリは、ゆっくりと僕の肩にその身を任せてきた。僕はさりげなくアカリの肩に手を回すと、その潤んだ唇を見て思わず呟いた。

「イチゴみたいだな」

「えっ？」

「後でイチゴのショートケーキを食べよう」

「ショートケーキじゃなくて、大きいのがいいな」

僕はそんなアカリがどうしようもなくいとおしくて、イチゴのように甘く酸っぱい唇を求めた。まぎれもないアカリの味をゆっくりと噛み締めながら、僕は二人だけの夜がどこまでも続いていくこと

を頑なに信じて疑わなかった。

Story 2 - Part . 6 -

アカリはその後、しばらく僕のところに留まった。僕らは空白の九ヶ月を埋め合わせるようにお互いの想いを確かめ合い、その体と心の隅々までを貪欲に求め合った。僕はそうしていつまでもアカリと一緒に過ごす日々を求め続けた。それはあたかも、アカリへの愛を確認するかのような行為だったが、とにかく僕はそうせずにはいられなかった。アカリと一瞬でも離れることによつて、二人の間に決して埋まることのない深い溝ができてしまうように思えた。そう、僕は既にアカリを愛していたのではなく、ただ愛そうと努力しているだけに過ぎなかったのかもしれない。

アカリが東京へ帰つてからも、僕の心は激しく揺れ続けた。秋が深まるにつれて再び仕事が忙しくなったが、僕はむしろそのことを喜んでもいた。できるだけアカリのことを考えないようにすることで、自分の真の想いを誤魔化したかったのだ。だから僕は、自ら進んで仕事を引き受け、深夜になるとアパートに帰つて死んだように眠る日々を続けた。そう、僕の心は既に別のところにあつたのだ。いや今にして思えば、この札幌に來た時から僕の心は既に変わり始めていたのだ。そして僕は、ただそのことをアカリという隠れ蓑を使つて誤魔化してきたのだ。もつともそんな小手先ばかりの言い訳が長続きするはずもなく、季節が秋から冬になつたことを偶然の契機にして、僕の周囲は大きく転換していった。

それはクリスマスイブ、つまり僕の二十五回目の誕生日の夜だった。その日は珍しく仕事も早く終わり、僕は煌びやかな街のイルミネーションを見ることもなく、足早に自分のアパートに帰ってきた。僕は理屈抜きで疲れていて、とにかく柔らかいベッドで眠りにつきたかったのだ。僕はカバンを放り投げて素早く服を着替えると、そのまま冷たいベッドの中に潜り込んだ。『ああ、これでやっと眠れ

る……』でも、僕のそのささやかな願いは、ある一人の訪問者によって脆くも崩れ去ってしまった。

玄関の戸を開けると、そこにはケーキとワインを持ったトウコが立っていた。トウコはサンタクロースと見まがうばかりの真赤なワンピースの上に、雪のように白いコートを羽織っていた。

「メリークリスマス、いや、誕生日おめでとうかな？」

屈託のない笑みを浮かべるトウコに、僕は今夜こそ自分の気持ちに素直になることを誓いながら、そのまま黙って部屋に招き入れた。
「外は寒いね」

手のひらに息を吹きかけるトウコを、僕はその勢いのままに抱き締めていた。もはやそこに迷いはなかった。

「ウチダくん、どうしたの？」

「俺、前からトウコのことが好きだったんだ。今になってやっとわかったんだ。やっと気がついたんだ」

「……私も」

僕はトウコと互いの唇を求め合った。部屋の寒さも気にならなかった。ただトウコの温かい唇の感触に酔いしれていた。

「嘘、よね」

その掠れた声を背中で聞いた僕が振り返ると、そこには焦点の定まらない視線でこちらを見ながら立ちすくむアカリの姿があった。

「どうしてここに」

「今日はクリスマスイブだから、ヒロミの二十五回目の誕生日だから、ベランダに隠れて帰ってきたら思いきり脅かそうと思ったのよでも、どうして……」

その後どれほどの時間が経過したのか、僕には皆目見当もつかなかった。僕ら三人はその場で押し黙ったまま、誰一人として言葉を発しなかった。奇妙に歪んだ時の流れと重苦しい雰囲気の中で、心臓の鼓動だけが高らかに響き渡り、僕は緊張のあまり喉がからからに渴いた。

「私、帰ろうか？」

ようやく放たれたトウコの言葉に僕は意を決すると、精一杯の勇気を振り絞って今のありのままの気持ちを二人に、そしてアカリに伝えようとした。

「いや、トウコもここにいてくれ。アカリ、今の俺はトウコが好きなんだ。もちろん、アカリと過ごした日々は忘れることができないし、この世界でアカリが一番だと思ってきた。いや、思うまでもなく一番だったんだ。でも、札幌に来てから少しずつ変わってきたんだ。アカリが一番だった自分の気持ち、いつの間にかトウコに移っていたんだ。理不尽だとも思うし、とんでもないことを言っていることはよくわかってる。でも、俺の心はもう決まってしまったんだ。もうアカリのことを、前みたいに想えなくなっただんだ……。すまない」

僕の必死の訴えがアカリに届いたのは明らかだった。でも、それをアカリが理解したかどうかはわからなかった。もちろん理解はできないだろうとも思った。誰がどう考えても、僕の言っていることは理不尽で筋が通っていないからだ。でも、やはり僕は言わなければならなかった。アカリには最後まで嘘をつきたくなかったのだ。

「せっかくイチゴのケーキ買ってきたのに、食べられなかった」

アカリは消え入りそうな声で呟くと、そのまま僕のすぐ脇を通って外に出ていった。そうしてアカリのいなくなった空間には、その移り香とともに小さな箱が落とされていた。僕は、トウコの哀しげな視線も気にせずに箱の中身を見た。そこには甘い香りを生み出す赤いコロンの小瓶とともに、一片のバスデイカードが入っていた。そして僕は、そこに書かれていた言葉を見て、激しい心の震えが涙となって溢れ出てくるのを止めることができなかった。『Allways Love You』と書かれたその文字に。

「私、やっぱり帰るね」

トウコはそう言うと、物音ひとつ立てずに僕のもとを去っていった。いや、トウコがいなくなったのを僕が認識したのは、その声が

聞こえてかなり経ってからだった。僕はその間、バースデイカードを握り締めながらただうめくように泣いていたのだ。頭の中では、アカリと過ごした日々が映画の回想シーンのように次々と映し出され、そのバックにはアトラニック・スターの「オールウェイズ」がエンドレスで流れていた。未だ元に戻らない奇妙な時間の流れの中で、僕は自分の想いを見失いそうになっていた。僕は台所で立て続けに水を三杯飲むと、ベッドに座ってアカリが持ってきたイチゴのケーキを食べながら、トウコの買ってきたワインをひたすらに飲み続けた。どれだけ飲んだところで酔いは回らなかったが、それでもいつの間にか眠ってしまったらしく、気がついた時には窓のカーテンを通して、まるでルーベンスの絵画にあったような朝の柔らかな日差しが優しく僕を包み込んでいた。僕は、目の前に廃墟と化したケーキと空になったワインのボトルをぼんやりと見ながら、石のように硬くなった自分の意識を少しずつほぐし始めた。そう、何はともあれ僕は前に歩き出さなければならなかった。全ては起こるべくして起き、アカリは僕のもとを去っていった。覆水は盆には返らないのだ。たとえ行く手に無限の荒野が広がっていたとしても、血反吐を吐いてでも僕は自分の幸せを掴まなければならなかった。そうするしか、今の僕に生きる術はないのだから。

Story 2 - Part 7 -

でも、僕の歩みは遅々として前に進まなかった。年が改まり冬の厳しさが増すにつれて、僕の心はどうしようもない虚無感に覆われていった。トウコと一緒にいても、僕はその心の寒さを拭い去ることはできなかった。トウコのことを愛してはいたが、アカリがいなくなったことで、僕の一部は決定的に損なわれてしまった。そしてトウコにはそれを埋めることはできなかった。そう、僕はその時になって初めて気づいたのだ。確かに愛していたのはトウコだったが、アカリとはそんな愛という名のもとではなく、より深い根源的な部分で繋がっていたのだ。アカリを前にすれば、愛などという言葉は本当に些細で陳腐なものだった。僕はアカリと別れたことで、自身の心の半分を永久に失ってしまったのだ。僕は後悔していた。生まれてからこれほど後悔したことはなかった。僕はアカリに何度も電話をかけたが、一度として繋がることはなかった。仕事場にもかけてはみたが結果は同じだった。僕はやり場のない怒りと寂しさを我慢できずに、毎晩のように部屋でウィスキーを飲み続けた。どれだけ飲んでもどうしようもないことはわかっていたが、僕はもう自分自身から逃げ出したかったのだ。

それは、北海道にもようやく遅い春の訪れが感じられるようになった四月半ばだった。僕が仕事を終えて、いつものようにウィスキーの瓶を抱えながら自分の部屋に帰ってくると、不意に携帯電話の着信音が鳴った。ここのところ誰からも電話がかかってこなかったので、いぶかしみながらも出てみると、そこからは東京にいるサトシの切羽詰った声が聞こえてきた。

「おいヒロミ、知ってるか？ アカリちゃん会社辞めたぞ」

僕の周囲には、サトシの声以外は何も聞こえてこなかった。時はそうして、死んだように僕を包み込んでいた。

「おいヒロミ、聞いてるのか？」

「あ、ああ」

「お前、アカリちゃんと別れたんだってな。この間トモコから聞いて驚いたぜ。まあ、何があったのかは知らないけど、一度東京に出てこいよ」

サトシはそれだけのことを告げると、僕の返事も聞かずに電話を切った。サトシの言葉自体は普通だったが、その端々には明らかに苛立ちが感じられた。僕は、アカリが会社を辞めたという事実がうまく呑み込めず、しばらくの間携帯電話を手に呆然とした。その原因が僕にあるのは明らかだったが、これで僕とアカリが共有していた唯一の客観的事実もなくなってしまった。僕はもうどうしていいのかわからずに、いつものようにウィスキーを飲み始めたが、今日に限っては飲み進むにつれて、不思議と頭の中が鮮明になっていった。恐らく何らかの原因で一種の覚醒作用が働いているのだろうが、いずれにしてもサトシの言うとおり、ここは一度東京に行ったほうがいいと納得し、その後は静かに微笑みかけるアカリの姿を臉の中にイメージし続けながら過ごした。

半月後、僕はゴールデンウィークを利用して東京に向かった。僕はまずアカリのアパートに向かったが、既に別の人が居住していてそこにアカリの影を見出すことはできなかった。次に僕はサトシとトモコの暮らすマンションに行き、一年ぶりに二人の元気そうな姿を目の当たりにした。僕ら三人はひとしきり抱き合い、久しぶりの再会の雰囲気味わうと、サトシは僕をリビングのソファアに座らせた。

「ところでさっそくなんだけど、アカリ会社辞めて今どこにいるか知らないか？ トモコなら居場所がわかってるんじゃないかと思うんだけど」

「それがわからないのよ。大体、会社辞めることだって私に言ってくれなかったし、本当に寝耳に水なのよ」

トモコは、僕の目の前にコーヒーを出しながら申し訳なさそうに

そう答えた。久しぶりに見る彼女は、白いカッターシャツにベージュのパンツ姿で、その表情は以前とは明らかに異なり柔らかかった。僕はそこに家庭というものを垣間見た気がして、懐かしさと切なさが入り混じった不思議な気分になった。

「それよりヒロミ、どうしてお前たち別れたんだ？ 二人とも、あんなに仲がよかったのに」

サトシのもつともな疑問に、僕はこれまでの経緯を正直に答えた。僕が別の女性を好きになったこと、そしてそのことによってアカリを傷つけ、今になってその大切さが身に染みてわかったことを。

「そうか、お前の気持ちはわからなくもないけど、今度のことはどう考えてもお前が悪いな」

「わかってるよ」

ここでサトシに殴られても仕方ないと思った。誰に言われるまでもなく、全ての責任は僕にあった。でも、サトシは僕を優しく諭しただけで、咎める素振りさえ見せなかった。もつともそれはトモコ同様、家庭を持ったことでの落ち着きなのかもしれない。

「まあ、何はともあれアカリちゃんがいらないことには始まらないな。トモコ、お前本当に心当たりないのか？」

「実は、たまに携帯に電話はかかってくるんだけど、アカリどこにいるのか教えてくれないのよ」

トモコは僕を見ながら、困ったような申し訳なさそうな表情を浮かべた。二人の心配は痛いほど心に染みたが、ともあれ僕に手がかりがないことは明らかで、仕事で時間が作れなかったこともあり、そのやるせない想いを胸に抱えながら札幌に帰るしかなかった。

その後も、アカリの行く先は依然としてわからなかった。月日だけが悪戯に過ぎ去り、増えたのはウィスキーを飲む量だけだった。自業自得ではあったが、僕はアカリがいなくなったことで心のバランスを失い、それは体調に、やがては仕事にも如実に現れていった。トウコとの間にも次第に溝ができ始め、気がつくと僕は本当に一人になっていて、現実と夢の間をまるで夢遊病者のようにあてもなく

彷徨い続けた。そう、僕はもうアカリなしには生きていくことさえ困難になっていた。自分の力で立ち上がることをさえできなかったのだ。

僕が久しぶりにトモコからの電話に出た時、部屋の窓からは白い雪が妖精の羽根のようにひらひらと舞い降りるのが見えた。

「アカリ、見つかったわよ」

僕は一瞬耳を疑った。一年も終わりを迎えようかという十二月の半ばになって、僕はようやく一筋の希望の光を見つけたような気がして現実へと立ち返り、取るものも取りあえず東京へ向かった。僕にできることは、とにかく急ぐことだけだった。

「アカリ……」

僕の目の前には、病院のベッドに横たわる久しぶりのアカリの姿があった。アカリは静かな寝息を立てて眠っていたが、そのやつれ具合を見るにつけ、僕は自責の念を抱かずにはいらなかった。トモコからの電話でアカリが入院していることを聞いた時もそう感じ、僕は一刻も早くこの病院に駆けつけたのだが、現実はその姿を目の当たりにしたことで、その想いはなお一層強いものとなった。

「ウチダくん」

不意に横から聞こえてきた声に、僕ははっと目が覚めた気がして反射的にトモコを見た。

「もちろん、ウチダくんだけが悪いんじゃないけど、アカリの気持ちもわかってあげてね」

「でも、どうして」

「実はね、前にウチダくんが私の家に来た時、私アカリの居場所は知らないって言ったけど、本当は知ってたの。アカリが会社を辞めたことも。アカリ、ウチダくと別れてから相当辛かったんだと思う。体中から生気がなくなったように落ち込んで、正直見ていて痛々しかったわ。ウチダくんもわかってると思うけど、アカリ、母親を亡くしてから家族と呼べる人はいなくなっちゃったし、そういう意味ではウチダくんだけが心の支えだったと思うの。でもそのウチダくんとうまくいかなくなって、心もだけど体調も崩しちゃって、それで会社を辞めたの。住む所を変えたのも、ウチダくんとの思い出のない場所で一から出直したいからって言ってたわ。だからウチダくんには居場所を教えられなかったの。アカリから口止めされてたから。でも、それからアカリの体は悪くなる一方で……。こんなことなら、もっと早いうちにウチダくんに来てもらってればよかったのかも」

アカリの寝顔を見ながら、切々とその想いを語るトモコの目には、うつすらと涙が溜まっていた。僕は改めて自分のしてしまったことを激しく後悔し、アカリに対する贖罪の思いで一杯になった。何とかしてやりたい、助けてやりたい、どうして僕は医者ではないのだろうと、無意味な自問自答を繰り返した。何もかもがもう遅いことをわかっていながら、でも僕はひたすらアカリを見守り続けるしかなかった。

その夜、僕はトモコと交代してアカリのそばに付き添っていた。病室の窓からは、星たちから見放された弓張月が寂しげに浮かんでいた。その姿に痛々しさを感じながらもベッドに目を落とすと、永い眠りから覚めたアカリが僕のほうを見てほのかな笑みを浮かべていた。

「目が覚めたんだね」

「来てくれたのね」

アカリの言葉は温かく、その眼差しは聖母マリアのような慈愛に満ちていた。僕はもう、何と言っているのかわからなかった。

「ごめんな。本当にごめんな。俺のせいでアカリ……」

「ヒロミのせいじゃないわ」

「いや、俺のせいだ。俺がアカリのことを守り切れなかったから。でも、もう離さないよ。いつまでも、俺たちは一緒だから」

僕がありったけの想いを込めて告げた言葉に対して、アカリはなおもかすかな笑顔を浮かべながら、視線を天井に移して呟いた。

「また、二人でイチゴのケーキが食べたいな」

僕はそんなアカリの姿を見て、改めてその一日も早い回復を願い、もう二度とアカリを離さないことを、一生をかけてアカリを守り抜こうと心に堅く誓っていた。アカリを窓外の弓張月のような孤独にさらすことのないように、その慈愛に満ちた笑顔をいつまでも絶やすことのないように。

その後も僕は東京に留まり、アカリの看病を続けた。その具合がよい方向へ向かっていないことは誰が見ても明らかだったが、僕は

そうした客観的な事実などどうでもよかった。もちろん、アカリが一刻も早く回復することは大事だったが、僕は何よりアカリのそばに居られるだけで満足だった。そう、僕はアカリと一緒にいることで、自分の損なわれた部分を取り戻すことができるのだ。そして二人は完全な人間として、未来に向かって永遠に生き続けることができるのだ。

それはクリスマスイブ、つまり僕の二十六回目の誕生日の夜だった。星が見たいというアカリに急かされるように、僕らはエレベーターで病院の屋上に向かった。でも運の悪いことに、その夜空は一面の雲で覆われていて、数少ない東京の星すら見えない状況にあった。

「今日は星見えないね」

「曇ってるからな。アカリ、寒くないか？」

「ううん、平気よ」

でも僕は、車椅子に乗ったアカリの肩から白いカーディガンを羽織らせた。札幌ほどではないが真冬の東京はやはり寒く、二人の吐く息が夜空に白く映し出された。

「ヒロミ、あなたと一緒に過ごすことができて幸せだったわ。思えば突然に、交通事故みたいに始まった二人だったけど、今の私にはもうヒロミしかないの。これから、ずっと私のそばにいてくれる？」

「もちろんさ。今までも、そしてこれからもずっと二人でいような」
「ありがとう。私、ヒロミが札幌に行っちゃってからずっと寂しくて不安だったの。お母さんが死んだ直後だったし、自分の周りに誰もいなくなっちゃって。でも私にはヒロミがいる、ただそれだけでやってこられたの。寂しさや不安も何とか抑えてこられたの。だから一年前は辛かった。唯一の支えだったヒロミまでいなくなったらよな気がして」

アカリの言葉のひとつひとつが僕の心を鈍く刺した。もちろん、

刺されても当然だった。鋭いナイフで抉られても仕方なかった。その痛みに耐えることしか、今の僕にできることはなかった。

「今でも後悔してるよ。許してくれなんて言えないよな。でも、信じてほしい。俺が必要としているのはアカリなんだ。アカリだけなんだ。愛してるなんて言葉では言い表せないくらい、俺はアカリだけを求めてるんだ」

「もういいのよ。こうしてここにいてくれるだけでいいから……。そうだ、ヒロミ今日誕生日だったね。プレゼントは買えなかったんだけど、はいこれ」

アカリが差し出したのは、バラの花に飾られた一片のバースデイカードだった。でも僕は、それをアカリの温かい手から直接受け取ることはできなかった。その瞬間アカリの首はがくんとうなだれ、もう二度と僕に向かって生きた表情を浮かべることがなかったからだ。僕は何度も、いや何十回も声が枯れるまでアカリの名前を呼び続けたが、それはただ虚空を彷徨うだけだった。折りしも降り始めた雪が、僕を、そしてもう戻ることのない旅に出たアカリを優しく包み込んだ。僕はアカリの手からこぼれ落ちたバースデイカードを拾い上げると、そこに書かれてある文字をゆっくりと目で追った。僕の心は激しく震え、とめどなく溢れ出る涙を抑えることができなかった。そう、アカリは知っていたのだ。自分の人生が最期の段階にあったことを。だから僕を、初めて二人で抱き合った屋上に誘ったのだ。僕は自分の涙と降りしきる雪で滲んでいくカードの文字を、いつまでも繰り返し目で追い続けた。

『たくさんの思い出をありがとう。そして、たくさんの夢をありがとう。私が永遠の旅に出ることを許してください。』

ove You……アカリ』

Always L

Story 3 - Part . 1 -

気がつくと、僕は自分のアパートの部屋で、飲みかけの缶ビールと食べかけのイチゴのショートケーキを目の前に見ていた。そう、今日はクリスマススイブ、つまり僕の二十九歳の誕生日、そしてアカリの命日だった。僕は、イチゴのような甘酸っぱい記憶の渦からそうして舞い戻ってきた。三年前の今日、アカリがいなくなってしまうたあの日から、僕は凍てつくような心の寒さに震え続け、失われた自分の一部をあてもなく探し続けてきたが、その心が温かみを取り戻し、損なわれた自分を手に入れることは叶わなかった。僕はこの三年間本当に孤独で、そして何よりも寂しかった。自分自身を共々有できる人間の存在がこれほどまでに大切だということを、僕はこの三年間で痛いほどに味わった。僕はもう二度と、アカリのような女性にはめぐり逢えないような気がしていた。イチゴのように鮮やかで、その味のように繊細な心の持ち主は、アカリ以外には全く考えられなかった。僕は改めてアカリという人間の大きさを感じ、目の前のイチゴのショートケーキを再び食べ始めた。もう二度とは戻らない一人の女性を想いながら。

でも一方で僕の心の片隅では、未来に対するかすかだが揺るぎない希望が宿っていた。過去に捉われ続けることのない、新しい運命、新しい出会いへの飽くなき欲望が。僕は、ともすればアカリという過去の呪縛から逃れられなくなる自分を必死に建て直し、これまでの自分からの決別にその全精力を傾けた。その試みは必ずしもうまくはいかなかったが、それでも僕は、来るべき人生の新しい局面の到来を信じ続けた。

それは、年も改まった四月初めのある朝だった。その日は冷たい雨がしつとりと街角を濡らしていて、僕は会社に出勤する道すがらふと灰色の空を眺め、その向こうにこれまでの自分を見つめていた。

僕は三年余りの札幌での転勤生活の後、二年前の四月から東京の本社に戻っていた。札幌での生活は僕に様々な経験をもたらし、自身の不用意な行動から最も大切なものをも失う結果となったが、それでも僕は今となっては後悔していなかった。というより後悔しなくなかった。過去からの決別と将来への飽くなき探究心だけが、今の僕を支えていた。過去の経験は確かに大切な教訓で、決して忘れてはいけないことだが、かといっていつまでも捉われ続けてはいけないのだ。その想いを胸に抱きながらも、これからの新しい未来を求めていかなければいけないのだ。僕はそうして損なわれた自身の一部を癒し、別の新しい一部を求めようとしていた。

始業時刻間際に会社に着き、職場の自分の机に腰を下ろしたが、一息もつかないうちに僕の周囲にいた全員が課長に呼び寄せられ、おもむろに朝の挨拶が始まった。課長の隣には新入社員らしき男女が三人並んで立っていて、皆一様に緊張した表情を浮かべていたが、一人一人の紹介に及んだ瞬間、僕はその中の一人の女性の名前を聞いて我が耳を疑った。

「みなさん、初めまして。オオタ アカリといいます」

こちらに向かって不器用に頭を下げるその女性の顔など、僕は全く見ていなかった。アカリという名前だけが、僕の頭の中をひたすらに駆けめぐっていた。そう、僕はその名前を聞いただけで自分の記憶に混乱をきたしていたのだ。ただ名前が同じだというだけで、目の前の女性と記憶の底に眠るアカリとを重ね合わせてしまっていた。

「アカリ……」

僕の呟きに、隣に立っていた同僚が怪訝な表情を浮かべたように見えたが、僕はそんなことなど少しも気にならなかった。それよりも、自分の中にまだアカリが生き続けていることを改めて思い知らされたようで、むしろそのことに少なからずショックを受けていた。しかも、あるうことが、僕とオオタ アカリは同じプロジェクトの一員としてともに仕事をするようになったのだ。僕は、更に混乱

していく自分を隠すように努めて冷静に振舞いながらも、ただ運命の悪戯に驚くばかりだった。もっともよく見ると、彼女はアカリとは全く似ていなかった。顔の造作や髪型はもちろんだったが、活発で物怖じしない性格は明らかに別の女性のものであり、僕は彼女とアカリとを重ね合わせたことを恥じた。と同時に、彼女が時折見せる子悪魔的な表情に危うさを感じ、次第に惹き込まれていく自分を抑えることができずにいた。

彼女と一緒に仕事を始めてから一週間ほどが過ぎたある日の夕方、久しぶりに仕事が早く終わった僕は、そのまま家に帰ってゆつくり休もうと会社の玄関から足早に駅に向かおうとしていた。とその時、突然の背後からの声に僕は反射的に振り返った。

「ウチダさん、ちよつとその辺でお茶でもしていきませんか？」

僕は、そこから始まるものが何なのかまだよく掴めていなかった。それが必ずしもいい方向へ向かうとは思えなかったが、僕はただ事実の積み重ねと時間の流れに従うしかなかった。

「私の名前、ひらがなで書くんですよ」

彼女……あかりは人なつこそうな表情を浮かべながら、目の前にあるレモンティーを口に含んだ。僕はあかりに誘われて会社近くの喫茶店に来ていた。そう、それはまさに、かつて僕とアカリがよく訪れた店だった。僕らは通り沿いの窓際の席に座り、テーブルの上には僕のコーヒーとあかりのレモンティー、そして二人分のイチゴのショートケーキが置かれていた。夜の七時を過ぎてはいたが、通りのイルミネーションと行き交う車のライトで外は眩いくらいに明るかった。

「イチゴのショートケーキ好きなの？」

「ええ、大好きです。小さい頃からよく食べてました」

「それって、お母さんが買ってきてくれたの？」

訊いた内容に自分でも驚いていた。何とかしてあかりとアカリを結びつけようとしている自分が情けなかった。たとえあかりが頷い

てくれたとしても、それでどうなるものでもないのだ。

「いえ、お父さんが会社帰りに毎日のように買ってきてくれました」
「へえ、あつ確か兄弟いるんだよね？」

「ええ、お兄ちゃんがいいます」

「じゃあ、お兄さんに可愛がつてもらってたんじゃないの？」

「そんなことはないですよ。いつも喧嘩ばかりしてたし」

でも、あかりの言葉の端々には兄と喧嘩をしていたような雰囲気は感じられなかった。むしろ、両親や兄から十分過ぎるほどの愛を受け取っているように見えた。僕は、ここでもアカリの薄幸な人生を思い出して言いようのない切なさを覚えたが、いずれにしても目の前にいる女性はアカリではないのだからと、そう自分自身を納得させた。

程なく、店内の音楽が聞き覚えのある懐かしいものになった。気がつくと僕は、あかりに聞こえるかどうかとも気にせずには呟いていた。

「アトランティック・スターの『オールウェイズ』だな」

「これって、そういう曲なんですか？」

当然のこととはいえ、あかりの反応に僕は愕然とし、やるせなさすら覚えたが、次の瞬間昔の記憶を無理矢理封印し、なおかつ十分に切り離してから改めてあかりに話しかけた。

「ところで、誕生日いつなの？」

「五月五日なんです。もうすぐですけど」

「本当に五月五日なの？」

「ええ。それが何か？」

「いや、親友の誕生日と同じだったから」

僕は努めて冷静に答えたが、内心は荒れ狂う海のような動揺で一杯だった。思えば一週間前に、あかりがこの会社にやってきてから、僕の心には波風が立ち通しだった。名前が同じだったことに始まり、イチゴのショートケーキが好きだったり、今度は誕生日まで同じだったり……。そう、僕は無意識のうちにアカリとあかりとを比較し、

その度に驚きと落胆を繰り返していたのだ。僕は、そんな自分の割り切れない想いにうんざりしながらも、同時に自分の中でのアカリの大きさを改めて感じないわけにはいかなかった。

「ウチダさんの誕生日は？」

「ああ、十二月二十四日なんだ」

「それって、クリスマスイブじゃないですか。ロマンティックでいいですね」

あかりは嬉しそうに、ショートケーキのイチゴを口に運んだ。それは素直というよりも、無邪気といったほうが適切だった。もっとも考えてみれば、あかりは大学を卒業したばかりの二十二歳で、その年齢にしてはやや幼さが残るものの、自分と同年代の女性と比べて異なることは当然だったが、それを差し引いても僕は、彼女との言葉のやり取りに不満が残った。でも一方で、あかりのあどけなさが、僕にある種の新鮮なイメージをもたらしたこともまた事実だった。すっかり温くなったコーヒーを飲みながら、僕はそんなあかりの笑顔を複雑な想いで見ていた。

Story 3 - Part . 2 -

ゴールデンウィークも終わりを迎えようかというその日は見事に晴れていた。僕はその朝、デイズニーシーの入口に並んでひたすら開門の時間を待っていた。隣には、初めてのテーマパークに目を輝かせ、期待に胸を膨らますあかりの姿があった。五月の、しかも午前八時前ではあったが日差しは強く、紫外線が皮膚から染み込んでくる感覚を痛いほどに味わっていた。是非もなく、今日は暑い一日になりそうだった。

「早く開かないかな。楽しみですよね」

あかりは弾むような声を出して、持っていたペットボトルの紅茶を一口飲んだ。僕はそんなあかりの横顔を見ながら、今日ここにいることの不思議さをただ噛み締めるばかりだった。そもそも僕らがここに来たのは、数日前にあかりが僕を誘ったからだ。一緒に行く予定だった友達が急に行けなくなったとかで、何故だか僕にそのお鉢が回ってきたのだ。僕は、この年にしてデイズニーシーに行くことに少し抵抗があったが、にもかかわらず二つ返事で承諾した。もちろんミッキーマウスではなく、普段着のあかりに少なからず興味があったからだ。会社で一緒に働く姿ではなく、毎日は何気なく過ごすあかりを知りたかったのだ。

しばらくすると正面のゲートが開き、僕らは急ぎ足で中に入ってしまった。大きな地球儀の脇をすり抜けて、人の波に従って分け入っていくと、目の前一杯に地中海を模した港が広がった。でも僕らはそれに驚き感動する間もなく、駆け足で人気のアトラクションに並んだ。ゴールデンウィーク中とあってどのアトラクションも大変な待ち時間で、結局その日一日で回れたのは本当に数えるほどだったが、僕は一日中をあかりと過ごせたことで、小さいながらもいくつかの新しい発見をした。それは、僕が今まであかりに対して抱いていたイメージとは明らかに異なり、甘えん坊ながらも意外にしっかり

りした面や、子供っぽさの中に落ち着いた大人の女性の姿を垣間見て、僕は自分でも驚くほど急激にあかりに惹き込まれていった。それは本当に久しぶりの感覚で、もちろん悪い気はしなかったが、こんなにも簡単に人を好きになっていくことに年甲斐もなく戸惑いを感じていた。

やがて夜も深まり、地中海でのシヨ一の時間がやってきた。僕らは辛うじて全貌が見渡せる建物の上から、あからさまに非日常的で幻想的な光景を目の当たりにした。

「綺麗ですね」

「本当だな」

シヨ一を見るあかりは文句なく可愛かった。僕は初めて彼女を抱きたい衝動に駆られたが、辛うじて踏みとどまった。ミッキーマウスの形をした神様に戒められたような気がした。

「今日は本当にありがとうございました。急に誘ってしまって、迷惑でしたよね？」

「そんなことないよ。俺も楽しかったよ。いつもとは違うオオタの姿も見られたし」

「幻滅しました？」

「その逆だよ。いい女だなんて思った」

素直に口から出た言葉に、あかりは一瞬驚いたような表情を見せたが、程なくいつもの悪戯っぽい笑顔に戻った。

「また、お世辞なんか言っても何も出ませんよ」

「本当のことだよ」

「私……」

僕は、なおも話を続けようとするあかりの唇に人差し指をあてると、次にその指を自分の唇に置き換えた。あかりが肩にかけていたバッグが地面に落ち、僕らはファイナーレの花火が夜空を煌々と染める中で激しくお互いを求め合った。それは僕にとって、久しぶりの生身の唇の感覚であると同時に、新しい運命の扉を開く儀式ともなった。

「あつそうだ、渡したいものがあつたんだ」

華やかなショーも幕を下ろし、周囲の人々もこぞって帰り始めた時、僕は不意にあかりへのプレゼントを思い出し、その体から離れると上着のポケットから小さな包みを取り出して見せた。

「今日、誕生日だったよな。たいしたもんじゃないけど」

「覚えていてくれたんだ、嬉しい」

あかりは満面の笑みを浮かべて呟くと、その包みを受け取り、ゆつくりといとおしそうに中身を開いた。

「実はさつき、そのシヨップで買ったんだ。気に入ってもらえると嬉しいんだけど」

「ありがとう。こういうのほしかったんだ」

それは、ミッキーマウスのイヤリングだった。あかりはさつそく耳に着け、僕に向かって自分の頬を近づけて見せた。銀色に光るそれは確かに子供騙しの安物だったが、夜の闇を切り裂く魔法のように輝き、僕はその眩しさがあかりと重なり合う瞬間を静かに感じながら、二人の愛が着実に育まれていくことを切に願っていた。

その後僕らは、夏に向かって日差しが強くなっていくにつれて、本当に自然な感覚でお互いを見つめ続けていった。あかりはその年齢のせい、彼女自身が過去に経験したであろう女の子の姿と、将来経験するであろう女性の姿が同居した不思議な雰囲気を持ち合わせていて、僕はその魅力を傍らで存分に感じながら毎日とともに過ごしていた。確かに、僕とアカリがかつてお互いに感じていたような一体感はなかったが、あかりには僕自身には永久にない鮮烈な感性があり、それが僕を圧倒的に魅了していた。そして季節が真夏を迎えるに至って、当然のことながら僕の心はあかり一色に染められていた。

Story 3 - Part . 3 -

八月初めに僕らは夏休みを取って、沖縄の果てにある小さな島へと向かった。そう、それはまぎれもなく六年前に僕とアカリがひと時を過ごした場所だった。本来なら、決して行くべき場所ではなかったが、僕はあえてそこを選んだ。自分自身がアカリから完全に離れたことを確認するためにも、僕はそこからあかりと出発しなければならなかった。

「いい気持ちね」

「ああ、そうだな」

僕らは、見事なまでにマリンブルーに染まった海でひとしきり泳いだ後、雪のように真つ白な砂浜に仰向けに横たわり、耳元を囁くように通り抜ける風の声を聞いていた。日除けのパラソルは六年前と同じように僕を静かに見つめていたが、そこにかつてのアカリを感じることはなかった。いや正確に言えば、アカリのことを思い出してはいたが、それはもう淡い追憶の彼方のことでしかなかった。

今現実の世界では、僕の隣にはあかりが三次元の立体的な微笑みを浮かべて佇んでいて、アカリは僕の隣にいても、過去の世界で二次元の平面的な微笑みを浮かべているに過ぎなかった。そう、僕の中で二人の女性は永遠に交わることがないのだ。そして当然のことながら、僕自身も過去と現在の間で永遠に交わることはなかった。

「何考えてるの？」

「いや、イルカにでも乗ってみたいなと思ってさ」

「イルカに？ 変なこと言うのね」

あかりの反応には少なからず幻滅したが、程なく再び過去と現在を結びつけようとした自分にうんざりして、横にあつたビールを一口飲むと、浅い眠りにその身を委ねた。少し経ってから唇にあかりをしっかりと感じたが、その感触から僕は、あかりは自分にとってのイルカではないと直感した。それは全く根拠のないものだったが、

僕はそうした第六感的なものがあながち間違っていないことを経験上よく知っていた。でも僕は強引にそれを否定し、自分にとってあかりはかけがえのない存在なんだと思い込もうとしていた。そこに無理があつたことをわかつていながら、そうしないことにはこれからの自分が危うくなるような気がしたのだ。

それは、夕食も終わってホテルの部屋へと戻った時だった。僕は部屋の冷蔵庫から二人分の缶ビールを取り出すと、ベッドの隅に座って窓の外の海を眺めていたあかりにそのうちの一本を差し出した。「ありがとう」

あかりは静かに呟くと、その缶を開けることなく両手で握り締めながら、横に座った僕の肩にゆっくりともたれてきた。

「静かね」

「ああ」

その瞬間、僕の脳裏に再び六年前の記憶が蘇ってきた。それは洪水のように僕を押し流し、僕はかつてアカリに言ったことを、あかりにも投げかけた衝動を抑えることができなかった。

「なあ、俺たち何か二人で一人って感じがしないか？」

「それってどういうこと？」

「だからさ、お互いが無意識のうちに、どこかで失くしてしまった自分の一部を探していたから、初めて会った時に惹かれ合ったんじゃないかなと思ってさ」

「難しいことはよくわからないけど、私はヒロミが好きよ。それだけじゃないけないの？」

子猫のように見つめるあかりをゆっくりと抱き寄せた僕は、その勢いのままに彼女を二人だけの官能的な世界へ誘った。確かにあかりは、僕に対して期待どおりの答えを与えてはくれなかったが、僕自身が過去と決別しようとしている中で、あかりにだけそれを求めるのは理不尽だと悟った。そう、僕とあかりの世界は他のどの世界とも異なる新しいものなのだ。その世界を、時の流れを理由にして勝手に重ね合わせてはいけないのだ。何がどうであれ、今ここにあ

るのは褐色の肌を伴ったあかりなのだから。

その後も僕は、あかりとの世界に漂い続けたが、どれだけの時間を過ごしても、どれだけ体を重ね合わせても、二人の間にかつてアカリと味わったような一体感を持つことはできなかった。僕は少なからず居心地の悪さを感じ、その苛立ちのあまりに度々あかりと口論になったが、考えてみれば人間関係、とりわけ男と女の関係に様々なパターンがあるのは当然のことであり、僕は違和感を抱えながらも、とにかくあかりとのオリジナルな関係を築くしかないと思った。

Story 3 - Part . 4 -

やがて秋の深まりとともに、僕の目の前にも十一月がすっかりと腰を下ろした。舗道の街路樹は初夏の緑の衣を脱ぎ捨て、その寒さの中に裸の体をさらしていた。道行く人々の背中にもどこことなく哀しみが宿っているようで、僕はそんな光景を見ているうちに、いつの間にか同じ哀しみを共有するようになっていた。

「ウチダ、実は話したいことがあるんだけど、近いうちに時間作れないか？」

十一月も半ばを過ぎたある日、会社の食堂で少し遅い昼飯を食べていた時に、サトシが神妙な顔つきで僕に尋ねてきた。

「何だよ、話したいことって」

「まあ、それはその時にな」

意味深に口ごもると、サトシは僕のそれ以上の追求を遮るように目の前にあったカレーをかき込んだ。サトシの話は見当がつかなかったが、その表情からあまりよくない話であることだけは容易に想像がついた。僕は何気なく天井を見上げながら話の内容に思いをめぐらせ、自分だけにしかわからないような小さなため息をつくしかなかった。

その三日後、僕とサトシは会社近くの居酒屋で居心地の悪い時間を共有していた。サトシは、僕が何度尋ねてもなかなか言いたいことを口にせず、ただ気を紛らわすかのようにビールを何杯も飲んでいった。二人が話をしないことで、普段は気にもしないような周囲の客や店員の取り留めのない声が容赦なく耳に入ってきて、僕は底知れぬ嫌悪感に苛まれた。僕は、次第に顔を赤らめていくサトシを正面に見据えながら、それでも我慢強く最初の一言を待った。やがて意を決したのか、サトシは僕の目の奥を見るような鋭い眼差しで話を切り出してきた。

「お前に話そうかどうかずっと迷ってたんだけど、まあ知らせない

のも友達としてどうかと思ってな」

「だから、何が言いたいんだよ」

「実はな、風の噂で耳に入っただけど、あかりちゃん、お前のところの課長と付き合ってるらしいぜ」

「えっ……嘘だろ？」

辛うじて口から出てきたのはそれだけだった。一体サトシは何を言っているのか、その後の話の展開はおろか、たった今放たれた話の中身すら理解できなかった。何より、唐突に結びついたあかりと課長を、頭の中で隣り合わせること自体が至難の業だった。

「少し前に、二人がホテルから出てくるのを見た奴がいるらしい。他にも夜の公園で抱き合ってたとか、いろいろな話を耳にしてな。まあ、俺が実際に見たわけじゃないからわからないけどな」

サトシは言い辛かったのか、語尾を濁した後、僕のほうを見ずに目の前の枝豆を齧った。

「多分、人違いだろう。あかりに限ってそんなことはないと思うし」「まあな。でも、女はわからないからな。脅しで言うわけじゃないけど、一度確かめてみたほうがいいぜ」

「ああ、でも……」

「なあ、俺はお前のことが心配で言ってるんだぜ。お前がアカリちゃんのことを忘れられないのはよくわかるし、あかりちゃんと新しい人生を始めたいのもわかる。でも、もう忘れるしかないんだぜ。アカリちゃんに戻ってこないんだから」

「お前に何がわかるんだよ」

僕の突然の物言いに、あっけにとられて目を丸くするサトシがいた。何だか無性に腹が立っていた。サトシの心配はありがたかったが、それがあまりに的を射っていたので、素直に受け入れることができなかったのだ。

「お前に俺とアカリの何がわかるっていうんだ。俺が誰を好きになろうと、お前には関係ないだろ。余計なお世話なんだよ。放って置いてくれ」

僕は、その捨て台詞に啞然とするサトシをその場に残して居酒屋を出ると、夜の街の喧騒の中をただ闇雲に歩き回った。サトシに自分の気持ちを見透かされていることがたまらなく嫌だったが、同時にサトシの言っていることが正しいこともまたよくわかっていた。そう思うと僕の頭の中は、寄せては返す波のような不安で一杯になっていた。あかりが課長と一緒にいる姿を想像することは困難だったが、かといってそれを否定するほどの根拠も自信もなかった。確かにサトシの言うとおり、人間というものは、とりわけ女はサルガッソーの底なし沼のように奥深く、その全てを知ることとは不可能に近かった。僕も、仕方のないことながらあかりの全てを知っているわけではなかった。その意味で、僕はアカリといたときのようない体感や安心感を、あかりに対して感じてはいなかった。そう、僕とあかりの世界は、自分たちが感じているよりもはるかに儚く、砂上の楼閣のように脆弱なものだったのだ。

それは季節が冬に改まり、街中にクリスマスのイルミネーションが溢れ出した十二月の始めだった。その日の夜遅く、会社の同僚たちとの忘年会を終えて、一人駅に向かって歩いていると、ほんの十メートルほど先の目の前を一組の男女が通り過ぎた。それはホテルを出てタクシーに乗ろうとしていた二人連れで、それ自体は珍しいものでもないのだが、その二人の顔をはっきりと見た瞬間、僕は背筋が凍りつくほどの寒さに襲われた。それが真冬の寒さのせいだったらどれほどよかっただろうと思いつつも、僕はその現実から逃れるわけにはいかなかった。

女のほうがあかりであることに間違いはなかった。あかりは黒いロングコートを身にまとっていて、いつもとは明らかに違う大人の女性の雰囲気醸し出していた。僕は普段目の当たりにしている姿とのギャップに驚き、少なからず戸惑いを覚えたが、隣にいた男のほうに目を移した瞬間、僕は自分の予想とは異なる人物であることに気づき啞然とした。その男は同じ職場で、しかも僕の隣の席に座

っている後輩のホリウチだった。二人は足早にタクシーに乗り込むと、そのまま僕の視界から夜の闇の向こうに消えていった。僕は抑え切れない感情の高ぶりを持って余しながらも、懸命に目の前に起こった事実を理解しようとした。短時間の記憶を巻き戻して、もう一度脳裏に蘇らせようとした。でも、それは無駄というものだった。

あかりが後輩とホテルから出てきたという事実は、既に僕の認識の限界をはるかに超えてしまっていたからだ。以前サトシから聞いた課長とのことも頭を掠め、僕はそこから何を考え、何を導き出すかがよくわからなくなってしまった。算数が苦手だったこともあり、この難解な多元方程式は一晩かかっても解き明かせそうになかった。僕は割れるように痛み出した頭を激しく左右に振りながら、ただ寒風の吹きすさぶ舗道を再び歩き始めた。今はとにかく、一刻も早く家に帰って、熱いシャワーを浴びることしか思い浮かばなかった。

その後僕は、あかりに会う度にそのことを問いただそうと試みたが、いつも寸前で言葉を飲み込んでしまった。そう、ここに至って僕は単純に聞くのが怖かったのだ。あかりに事実を認められ、僕自身果てしなく傷つくのが嫌だったのだ。そして、そんなどこまでも優柔不断で勇気のない自分にもまた嫌気がさしていた。でも、いつまでもそこから逃れているわけにはいかなかった。結局のところ、それは来るべくして訪れ、僕は台風に巻き込まれるような一日になることを予感しながらその瞬間を迎えた。

Story 3 - Part . 5 -

その日はクリスマスイブ、つまり僕の三十回目の誕生日だった。

そして、それは同時にアカリの命日でもあった。その夜、僕とあかりは会社近くの店で、二人だけのささやかな誕生日を祝うべくフランス料理を食べた後、店から少し離れたボードウォークの海辺に佇んでいた。頭上には、数少ないながらも精一杯の自己主張をしている星たちが、僕らの姿を母親のような優しい眼差しで見ている。僕はいつもより少し多めにワインを飲んでいたせいか、普段なら肌を刺すように冷たく感じる真冬の海風も、今夜ばかりは顔のほてりを冷やすのにちょうどよかった。あかりも同じだったらしく、白いハーフコートの上に少し長めの髪を躍らせながら心地よさそうに風と戯れていた。

「少し飲み過ぎたかな？」

「でも、今日はヒロミの誕生日なんだからいいんじゃない？」

無邪気に微笑むあかりを見て、僕はこのまま時が流れることに抵抗がなくなりかけたが、やはり尋ねないわけにはいかなかった。それが飲み過ぎたワインの勢いかどうかはわからなかったが、いずれにしても、僕はあかり自身の口から真実を聞かずにはいられなかった。たとえそれが、いかなる結末を迎えるとしても。

「前からあかりに聞こうと思ってたことがあるんだけど」

「急に改まって、一体どうしたの？」

「いや、これはあくまで風の噂なんだけど」

「だから何よ」

「お前、課長と何かあったのか？」

あかりは僕の言ったことが理解できなかったらしく、こちらに向けられた眼差しは平板だった。もっとも、訊いた内容が曖昧だったことも事実で、僕は改めてストレートに問い直した。

「課長と付き合ってるのか？」

「えっ、どうして？」

「お前と課長が、一緒にホテルから出てきたところを見た奴がいるんだ」

「私と課長が？ 本当に？」

「ああ。他にも、公園で抱き合ってたのを見た奴もいるんだ」

言いながら、あかりの表情の変化をじっと見ていたが、彼女は瞬きひとつせずには啞然とした顔を見せた後、急に満面の笑みを浮かべながら僕に尋ねてきた。

「それで、ヒロミはその噂を信じてるの？」

「信じてはいないけど」

「じゃあ、何故私に聞くの？」

「確かめたかったんだ。あかりの口から、はつきりと聞きたかったんだ」

「じゃあ、はつきりと答えるわ。それは人違いよ。私は、課長となんかホテルに行つてないし、ましてや付き合つてなんかいないわ。そんなこと、当たり前じゃない」

既に笑顔が消えていたあかりは、僕から目をそらせて海の彼方を見つめた。その言葉に嘘があるようには思えなかったが、半月ほど前に見かけた後輩との姿が頭を過ぎり、僕は再びあかりに問いただしたい衝動を抑えることができなかった。

「じゃあ、俺がこの間見たのは何だったのかな？」

「何を見たっていうのよ」

「半月前に、お前が俺の後輩のホリウチと一緒にホテルから出てくるのを見たんだ」

「私が、ホリウチさんとホテルに？」

「忘年会の帰りに偶然見かけたんだ」

僕は再びその表情の変化を確かめようとしたが、あかりはまたも表情ひとつ変えなかった。

「ああ、あの日ね。確かに私、ホリウチさんと一緒にホテルに行つたわ」

「何だつて？」

「ちよつと悩んでたことがあつて、彼に相談にのつてもらつてたのよ。ホテルのラウンジでお茶しながら」

「何を相談してたんだよ？」

「何だつていいじゃない。私と彼は同い年だし、会社の同期なんだから」

そう言われてしまうと、僕はそれ以上あかりを問いつめるわけにはいかなかった。でも僕は、あかりの言葉の中に何かひつかかるものを感じていた。言葉自体ではなく、その言い方に釈然としないものを感じたのだ。するとそんな僕の心を見透かしたのか、あかりが僕の目を覗き込みながら問いかけてきた。

「今日のヒロミ、ちよつと変よ。そんなに私のことが信じられないの？」

「何かがひつかかるんだよ。うまく言えないんだけど、どうも納得がいかないんだよ。お前のことを信じたいけど……。釈然としないんだ」

僕の言葉に、あかりは諦めたような投げやりな表情を浮かべると、少し鋭さを増した眼差しでこちらを見ながら言い放った。

「じゃあ、どうすれば信じられるの？ 納得できるの？ 私が、課長やホリウチさんと付き合っているって言えば信じるの？」

「信じないさ。信じないけど、そういう問題じゃなくて……」

「じゃあ、何が問題なのよ」

声を荒げたあかりに、僕はうまく言葉を返すことができなかった。そう、僕は既に何が問題なのかがはつきりとわかっていたのだ。あかりという人間が信じられないことが問題なのだ。かつてアカリを信じることができたように、アカリを自分の一部だとさえ思えたように、僕があかりを想えないことが根源的な問題だったのだ。

Story 3 - Part . 6 -

「昔、好きだった女性がいたんだ」

「えっ？」

急に話を変えた僕を、あかりは啞然とした表情で見ている。前の女の話をして意味のないことは十分にわかっていた。でも、僕は言わずにはいられなかった。アカリのことに触れずには、今の自分の気持ちを正確に、正直に伝えることができないように思えたからだ。

「俺は、その女のことを愛していた。いや、愛なんて陳腐な言葉じや言い表せないくらいに、お互いを求め合っていたんだ。偶然だけどアカリっていう名前だった」

「本当に偶然ね」

あかりの言葉には、精一杯の皮肉が込められていた。さらにその表情には、『だからどうしたのよ？』という言葉が刻まれていた。

僕はそんなアカリの反応をまとめて交わすと、あえてゆっくりと話を続けた。そうすることが逆に、あかりに理解を促すための最短距離だと思ったからだ。

「僕とアカリは会社の同期で、入社式の時にお互いの存在を認めてそれから付き合い始めたんだ。そこに理由なんかなかった。僕らは本当に自然な気持ちで、でも激しくお互いを求め合った」

「それで？」

「付き合い始めてから一年近く経った頃、急に彼女の母親が亡くなって、彼女は一人ぼっちになった。父親も兄弟もいなかったから、本当なら俺が支えになってあげるべきだったんだけど、札幌に転勤することが決まってたから、俺はやむなく彼女を一人残して北へ向かった」

「ドラマみたいな話ね」

あかりの平板な受け答えなど、僕の耳には届いていなかった。僕

はただ純粹に、今の自分の気持ちを伝えたかったのだ。それが婉曲的で不器用な表現でしかなかったとしても。

「でも、俺は札幌で一人の同僚の女性と仲よくなって、結局彼女を手放してしまった。いつも会えなかった彼女ではなく、いつも一緒だった同僚のほうを選んだんだ。でも、彼女と別れてみて初めてわかったんだ。俺がどれだけ彼女を必要としていたのか、彼女を求めていたのかってことが。もともと、そう気づいた時にはもう遅かった。彼女は結局、俺の前から永遠にその姿を消してしまった」

「家出でもしたの？」

「死んだんだ。俺は後悔したよ、生まれてからあれほど後悔したことはなかった。でも仕方ないよな。どんなに悔いたところで、もう元には戻らないんだから。それからの俺は人を全く愛せなくなった。いや、愛することが怖かったのかもしれない。心の震えや切ない想いを感じることもなくなった。俺は、もう二度と人を愛せないんじゃないかとも思った。でもやっと、やっとめぐり合えたんだ。あかりと出会ってから俺は生き返った。体中に生氣が漲ったみたいだった。だから、俺はもう二度と同じ過ちは繰り返したくないんだ。お前を心の底から信じたいんだ。ずっと一緒にやっていきたいんだ」

僕は、精一杯の気持ちを込めてあかりに言葉をぶつけた。あかりには嘘をついてほしくなかったのだ。たとえそこに彼女の過ちがあったとしても、僕はお互いをわかり合うことで乗り越えたかったのだ。あかりはその場でうつむいたまま、僕と顔を合わせようとはしなかった。僕は想いの全てを吐き出したことで頭の中が空っぽになり、意識も朦朧としていた。もうこれ以上、言葉を発することは不可能だった。後はあかりからの言葉を待つしかなかった。

「誰も信じることなんてできないのよ」

「えっ？」

「人を信じることなんて不可能よ」

いつしか顔を上げて海を見ていたあかりは、やがて僕のほうを刺すような視線で見ながら言葉を続けた。

「現にあなたは今、私のことを信じてないでしょ？」

「信じたいんだ。今も、そしてこれから。だから、本当のことが聞きたいんだ」

「本当のことを聞いてどうするの？」

「そこからまた始めればいいさ」

「本当にそう思ってるの？」

「ああ」

「綺麗事ね。じゃあ、お望みどおり本当のことを言ってあげるわ。

あなたと付き合い始めて少し経った頃、仕事がつまづいなくて落ち込んでた時に、課長が優しい言葉をかけて慰めてくれたの。私、それでずいぶん救われて、それから何回か外で会って食事したりしているうちに……」

「寝たのか？」

「自然な成り行きだったわ。私は課長に癒され、課長も私で癒されて、お互いに相手を求め合ってたわ」

「それって、よくないだろ？」

「課長に奥さんがいるから？ 不倫だから？ そんなこと関係ないわ。お互いが相手のことを必要としてるんだから、それでいいじゃない」

「ホリウチとのことは？」

「同じ年だったし、会社の同期だったから、友達みたいな感じで遊んでただけ、ある時に彼から好きだって言われて……」

「じゃあ、俺がホテルの前で見たのは」

「まさか見られてたなんてね」

「俺は……俺とのことは何だったんだ？」

「もちろん、好きだったから付き合い合ったのよ。もっとも、あなたが私のことを信じられなくなったのなら別れましょうか？」

あかりの言葉に、僕はもはや何も言うことはできなかった。少し前まであかりを信じようと思っていたことの愚かさだけを、僕は今さらながらに痛感していた。

「俺が馬鹿だったよ。お前を信じようとした俺が」

「だから言っただけじゃない。人のことなんか信じられないって、信じちゃいけないって。あなた自身だって、昔彼女を裏切ったんでしょ？ もっとも、彼女だってあなたを裏切って他の男と付き合ってたかもしれないけど」

「おい、ちょっと待てよ。俺のことはいいけど、彼女の、アカリの悪口は言うな」

「いいじゃない、もう死んじゃった人なんだから」

あかりの口から出た言葉を、僕は黙ってやり過すわけにはいかなかった。少なくともあかりのような女から、アカリのことを言われることだけは嫌だった。どうしても許すことができなかった。だから僕は、その想いのままに行動することを憚らなかった。最後まで、僕が僕自身を裏切らないためにも。

Story 3 - Part . 7 -

「ちょっと、何する気？」

そのただならぬ気配を察したのか、動揺を隠しきれずにたじろぐあかりにゆつくりと近づくと、僕はその髪を優しくかき上げて、あらわになった耳元に向かってそつと語りかけた。

「大好きだったよ。もつとお前のことを信じたかったし、わかり合いたかった。もつとも今にして思えば、それも俺の独りよがりの願望に過ぎなかったんだよね……。さようなら」

恐怖のためか凍りついたように動かないあかりの、その瞳の奥に何も確認できなかった僕は彼女を正面に見据えながら、両手でその首をゆつくりと包み込んだ。

「やめて……」

あかりの懇願するようなうめき声も、僕の耳には全く届かなかった。あかりの表情が苦痛に歪むにつれて、僕が両手に伝える力も強められていったが、僕は決してあかりから視線を外そうとはしなかった。その最後の瞬間をこの目で見届け、自分の記憶の底にしっかりと焼きつけたかったからだ。程なくあかりの表情は平板なものになり、体全体に漲っていた力みがなくなっていた。その首はうなだれて、僕が両手を外すと、あかりは体全体から地面へと崩れ落ちた。あたりは物音ひとつせず、人が来る気配も全くなかった。ただ頭上に輝く数少ない星たちだけが、僕を、そしてもう蘇ることのないあかりを優しく見つめているだけだった。時はその瞬間に凍りつき、僕の足元は宙に浮いているかのように地面の感触を失っていたが、頭の中は自分のしてしまったことに比べてみれば驚くほどに冷静だった。僕はまず、鉛のように重たくなったあかりの体を抱きかえ、目の前に過ぎていた手すりを越えてその体を海面上の空にさらすと、次の瞬間両手を離して真下の水面に落とした。水しぶきがあかりの涙のように上がり、その体はもう二度と僕の目の前に

姿を見せなかった。僕は、静まり返った暗闇の中で何とか一筋の光明を見出そうとしたが、それは虚しい願いだった。そう、今ここに全ては終わってしまったのだ。僕は今、完全に空洞になってしまった自分の心を嘆き、その哀しさを涙に変えることを試みたが、不思議なことにそれは一滴も流れなかった。僕は足取りも重くその場を離れて歩き出し、どこへ行くともなく彷徨い続けたが、歩けば歩くほどに自分の心が虚しく孤独になることを感じたので、その想いを打ち消そうと携帯電話を取り出し、一番最初に頭の中に浮かんだ一人の男に電話をかけた。

「何だヒロミか。一体何の用だ？」

その声はまぎれもなくサトシだった。僕は電話の向こうにある、今の自分とは異なる世界の平穏な雰囲気急に懐かしさを感じ、とめどなく溢れ出る涙を抑えられなかったが、何とか平静さを取り戻すと努めて明るく話しかけた。

「いやさ、今日はクリスマスイブだろ？　メリークリスマスって言おうと思ってさ」

「何だよ、それ。そんなことを言うためにわざわざ電話してきたのか？」

「まあ、いいじゃないか。それよりお前、今何してるんだ？」

「今何時だと思ってるんだよ。これから寝るところだよ」

苛立ちを伴ったサトシの答えに、時間の流れを忘れていた僕はとっさに腕時計を見た。その針は既に夜中の十二時を指そうとしていた。

「こんな遅い時間に悪かったな。いや、お前の声が急に聞きたくなっつてな」

「毎日のように会社で会ってるだろ。声だって聞き飽きるほど聞いてるじゃないか」

「まあ、そうだな」

「お前……何かあったのか？」

「いや、本当に何でもないんだ。じゃあ、またな。トモコによろし

く

「おいっ、ちよつと待てよ」

続けて何かを言おうとしていたサトシの声を遮るようにして、僕は一方的に電話を切った。そうすると僕の周囲を再び静寂が支配したが、今度は不思議と孤独に苛まれることはなかった。わずかの時間ではあったが、サトシと話せたことで、僕の心は安らぎに満たされ虚しさは薄らいだ。でも今度は、アカリに対するどうしようもない懐かしさと切ない想いが胸に溢れてきて、息苦しいほどの感情の高ぶりに、僕はその場に倒れ込み蹲った。今の正直な気持ちのままに動いたらどんなに気が楽になるだろう、どんなに心が解放されるだろうと思いつつも、僕はその想いに押し流される自分を留めることができなかった。

『こんな場所で倒れていてはいけないんだ。立ち上がるんだ。立ち上がって、しっかりと歩き出すんだ』

どれほどの時間が流れたのだろう、やがてどこからか聞こえてきた声に促されるように立ち上がった僕は、再び前に向かって歩き出した。思えばそれは、僕自身の心の底からの叫びだったのかもしれないが、いずれにしても僕はここで倒れるわけにはいかなかった。しかるべき場所までは、たとえ這い蹲ってでも歩き続けなければならなかった。

Story 3 - Part . 8 - & エピローグ

気がつくと僕は、右手にイチゴのショートケーキの入った箱を、左手には数本の缶ビールが入ったビニール袋を持って、アパートの部屋のドアの前に立っていた。中に入ると僕はまず明かりをつけ、テーブルの上にケーキの箱と缶ビールを置いて座った。真冬の部屋は凍りつくほどに寒いはずだったが、僕は不思議とその寒さを感じなかった。あたりは物音ひとつせず、ただ奇妙に歪んだ空間だけがそこにあつた。僕はそうした雰囲気の中で缶ビールのプルタブを開け、息をつくこともなく一気に飲み干した。目の前の景色が一瞬揺らいだような気がしたが、僕はそれを気にすることもなく、次に箱からイチゴのショートケーキを取り出して、フォークも使わずに一口で食べ切った。イチゴの甘酸っぱさが口の中に広がって、僕はアカリとの甘酸っぱい記憶の中に吸い込まれた。でも同時に、アカリに対する切なくやるせない想いも蘇り、僕は居ても立ってもいられなくなった。そして、二本目の缶ビールを一口飲んだところで、僕はおもむろに便箋とボールペンを取り出し、アカリへの気持ちを書きにしようと試みた。文章にして形に残すことで、僕は自分の想いを確固たるものにしたかったからだ。

アカリへ

お前のいない今となつては、もうこんなことを書いても意味がないかもしれない。無駄なだけかもしれない。でも、言わせてほしい。書かせてほしい。俺は、今さらながらにお前を失くしてしまったことを悔いている。もとはと言えば、俺が他の女を好きになつてしまったことが原因だったけれど、自分が今同じことをされてみて、やつとお前の苦しみや心の痛みがわかったような気がする。そしてお前と築き上げた、お互いが自分の一部であつたような関係が、もう二度と他の女との間では叶わぬことが改めてわかった。本当に、お

前が死んでから四年も経って、俺はやつと全てを理解できたんだ。アカリ、俺を笑ってほしい。こんなにも愚かで無様な俺を。

ほんの数時間前、俺はある女を殺した。一年近く付き合って、俺は自分なりにその女との間に何か確かなものを築き上げようとしてきた。少なくとも、お互いを信じることのできる関係を望んでいた。でも、結果としてそれは虚しい試みだった。彼女は俺を裏切ったばかりか、こともあるうにお前のことを馬鹿にしたんだ。お前とのことを話し出した俺も悪かったけれど、あんな愚かな女にだけは、お前のことをとやかく言われなくなかったんだ。でも、考えてみればそういう俺自身もかつては愚かだったんだよな。お前を裏切って他の女を選んだんだから。

今さら言う意味も資格もないけど、許されなくても当然だけど、俺を信じてくれたお前には感謝している。今俺は全てを失い、自身をも失おうとしている。でもアカリ、お前だけは、お前と過ごした時間だけは、俺にとっては何より充実した真実の瞬間だった。そして、改めて言わせてほしい。

A l w a y s L o v e Y o u と。

それだけを書いてしまうと、もう心の中には何も残っていなかった。僕はゆっくりと缶ビールを飲み干し、その揺れ動く空間と記憶の流れの中で自分の素直な気持ちと向き合っていた。そう、今こそ僕は決断しなければいけないのだ。僕自身が取るべき最期の、そして最善の選択を。

僕はその場を立ち上がると、部屋の隅で埃を被っていた薬箱を持つてきて、中から小瓶に入った錠剤を取り出した。表面には睡眠薬の文字が書かれていて、僕はその蓋を開けると、目の前のテーブルに中身を全部出してみた。五十ほどのその白い粒は、僕にある決断を迫っているように思えた。かつて四年前にアカリを失った時も、その錠剤は僕に決断を迫っていた。その時は自分自身を失うことに躊躇いを感じ、その苦痛を想像した果てに踏みとどまったが、今日

の僕の頭の中は晴れた秋の空のように澄みきっていて、躊躇いや恐怖に思いを馳せることもなかった。僕はその白い粒を一掴み手に取ると、自分の人生の全てとともに口の中に押し込め、三本目の缶ビールでそれを一気に流し込んだ。薬とビールが流れ込む感触は、喉元を伝ってやがて胃の中へと持ち込まれた。次第に朦朧としていく意識の中で、僕は自分の人生の終焉を憂い、最後のビールを必死に飲み干そうとした。でもそれは叶わぬものとなった。僕が最後の一滴を飲む前に、完全にビールの缶が見えなくなっていたからだ。そう、三十歳のクリスマスを迎えて、僕は今ここに染み入るような暗黒の世界に身を置くことになったのだ。

目の前は本当に真っ暗だった。生まれてから、これほどの暗闇を経験したことはなかった。僕は手探りで出口を、いやせめて何かの手がかりを見つけようと試みたが、その両手は虚しく空中を彷徨うだけだった。僕は恐る恐る歩き始めたが、どこまで行ってもその暗闇から解放されることはなかった。でも僕は漠然とした恐怖と不安の中で、いつか一筋の希望がもたらされるものと信じて疑わなかった。根拠は何もなかったが、この状況が永久に続くとはどうしても思えなかったからだ。

案の定、僕の目の前にはぼんやりとした光のかけらが現れて、次第にそれははつきりとした一本の光の矢となった。ゆっくりとその光源に近づくと、彼方からかすかに音楽が流れてくるのが聞こえた。それが、アトランティック・スターの「オールウェイズ」だとわかるのにそう時間はかからなかった。急いでその光が漏れる隙間を両手でこじ開けると、一面が春の草原のような緑の大地となり、あたりは麗かな日の光で満ち溢れた。それは、僕がこれまで見たこともないような温かな優しい世界であり、まさにユートピアと呼ぶに相応しいものだった。草原を渡る風に誘われるままに歩いていくと、遠く彼方からこちらに向かってくる何かが見えた。始めのうちはそ

れが何なのか全くわからなかったが、五十メートルほどに近づいてきた時、僕はその叫び声からはつきりと認識することができた。

「アカリ！」

僕は自分の感情のままに叫び、前に向かって思いきり走り出した。アカリは真っ白なワンピースを身にまとい、その姿はさながら緑の大地を司る妖精のようだった。

「アカリ……」

僕は、すぐ目の前まで来ていたアカリを、その体がちぎれるくらいに強く抱き締めた。もう離したくなかった。何があっても、一瞬たりともこの胸の中から手放したくなかった。

「ヒロミ、会いたかった」

「もう二度と離さないからな。いつまでも一緒にいような」

それが夢幻の世界であつたとしても、今の僕にとってはもうどうでもよかった。少なくとも目の前にはアカリがいて、僕はその存在を体と心の全部で感じていたからだ。『Always Love

You』という言葉をお互いの心で唱えながら、そして僕ら二人だけの世界が永遠に続いていくことを願いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9752c/>

Always～イチゴなイルカをもとめて

2010年10月8日14時29分発行